中等國語讀本 落合直文編 巻八

375.9
Oc8
資料室

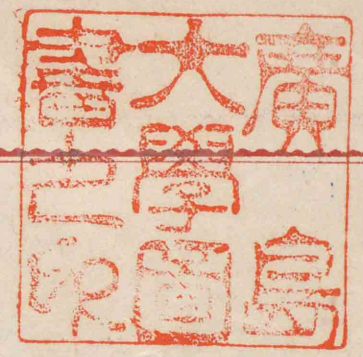
30297
教科書文庫
3
810
41-1902
200030
1974

375.9
Oc8
Oc8.

賀川正之
寄輝堂

資料室

24
28
19
31



中等國語讀本卷八目次

一、美術の保護その一……一
二、美術の保護その二……六
三、自然美……一〇
四、藝術家の逸話二章……一四
一、川成と飛驒工……一四
二、蟬丸と源博雅……一九
五、舊都の月……二四
六、想夫戀（今樣）……二八
七、鎌倉時代に於ける余が感想その一……二八

八、鎌倉時代に於ける余が感想その二……三二
九、那須與一その一……三六
一〇、那須與一その二……四一
一一、那須與一その三……四四
一二、荒野の末(短歌)……四六
一三、源平二氏の衰運……四八
一四、月夜逗子より友人に寄する書……五一
一五、源頼朝論……五七
一六、宇治河の先陣その一……六一
一七、宇治河の先陣その二……七〇
一八、宇治河の先陣その三……八〇

一九、古戰場を吊ふ文……九二
二〇、忠度と俊成……九四
二一、櫻(短歌)……九八
二二、詩歌論……九九
二三、歌がたりの一節……一〇六
二四、渡邊華山高野長英の傳記の後に……一一〇
二五、伴信友に與ふる書……一一五
二六、そゞろごと五篇……一二〇
一、雪の朝……一二〇
二、れも影……一二〇
三、過ぎにし方……一二一

四、賤しげなる物……一二二
五、見ぬ世の友……一二二
二七、文學家の逸話二章……一二三
一、殿守の伴の御奴……一二三
二、月上長安百尺樓……一二六
二八、文話一則……一三〇
二九、文學の價値……一三四

帝國圖書館藏

中等國語讀本卷八

一、美術の保護 その一

蒼々たるかの天、漠々たるこの土、その間、國をたつるものいくばくぞ。東に、睥睨するものあり。西に、窺窬するものあり。南に、北に、前に、後に、互に窺ふ。既に、國を、この間にたつるもの、よろしく、その富をにぎはし、退きては、百萬の敵軍、海を蔽うて來るも、守護するに足るべく、進みては、懸軍萬里、異疆絶域にのぞむも、勝を制するに足るべく、ときかして、この帝國のうち、家足り、人給し、貿易製造の途、

日に、開通することを、はからざるべからず。されど、これ、いまだ、國家の品位をたかむる所以にあらず。國家の品位をたかむる方策は、如何。

それ、いにしへより、傳來せる巧工の品物にして、よく、大に、よく、雄に、よく、高に、よく、壯に、よく、精に、よく、麗に、以て、一國々民の趣味を知るに足り、以て、一國々民の采丰を伺ふに足り、觀るものをして、景仰追慕の情に堪へざらしめ、聽くものをして、敬肅謹恪の心を生ぜしむるものは、即ち、所謂、美術品なり。故に、彼の建築、彼の彫刻、彼の繪畫、一面は、これが保存につとめ、一面は、これが振興につくさざるべからず。もし、美術品の保存と振興とをして、そのよろしきを得しめ、外國人をして、ますます、敬仰するところあらしめば、その、わが品位をたかむること、果して、いかにぞや。誰か美術問題を目して、閑人の閑問題となすものぞ。

わが帝國の美術たる、まことに、わが帝國歴史の一要素を組成するものにして、その繪畫、その彫刻、その建築、たとひ、幾分を、支那、天竺、三韓等の風姿に學び、構造にならひたるありとするも、その、我に入ることの久しき、遂に、この風土、この民心と同化し、形を變じ、勢を變じ、その精神は、論ずるまでもなく、全く、わが帝國の國情と、民心とに合一し、その美術品は、まことに、國民の趣味采丰をあらはす、唯一の要具とはなりぬ。

想ふに、藤原、源平の時代、北條、足利の時代、豐臣、德川の時代、

そのよりより、名工妙手、續々、出でたり。その殺伐的の時代にありては、堅牢無雙の城廓のごとき、建築的美術れこり、兜のごとき、鐙のごとき、鐔のごとき、目拔のごとき、緻精高妙の彫刻的美術れこれり。その佛教隆盛の時代にありては、大伽藍、大堂塔のごとき、建築的美術れこり、阿彌陀佛、毘盧遮那佛のごとき、最妙最巧の繪畫的美術れこれり。かくて、その建築、彫刻、繪畫などを見るに、一方は、亂世の相をあらはし、一方は、昌平の相をあらはせり。これらは、當時の世態人情をつまびらかにするを得るのみならず、彼の狷介不羈なる美術家が、眼、一世に超絶し、時と合はず、人と合はず、慨然、流俗中に奮ひて、巧品を製出したるも知らるべく、彼の豪邁逸宕なる美術家が、精神、飄乎として、天外に飛揚し、こゝに、大美術品を製出したるも知らるべく、彼の無我無欲なる美術家が、山に、水に、月に、花に、木に、竹に、草に、鳥に、猿に、犬に、蝶に、人に、雲に、雨に、風に、火に、その自然を描出したるも知らるべきにあらずや。誰かいふ、「われらに、アンジェロなし」と。また、「ラフェールなし」と。こは、皆、精査檢覈せざる罪のみ。

前代にれけるわが美術は、まさに、かくの如きものあり。さかして、維新のはじめ、社會風潮の一變するや、破壞の氣風、四方にれこり、人々、いたづらに、小利小智に流れ、美術のごときは、贅澤なりと唱ふるにいたれり。たまたま、有識の士ありてその不可なるを說けど、なほ、いまだ、勢力なく、美術の前途、轉

た、憂ふるに堪へざるものあり。

二、美術の保護 その二

想へば、古昔、王朝の盛なる、平安寧樂の都は、まことに、わが美術の叢淵なりき。その堂塔伽藍は、高く、半空に聳えて、雲、相迷ひ、木魚鐘聲、相應へて、竹林、鳥、れのづから、閑に、その建築は、雄麗宏壯、古今に絶して、鬼泣き、神哭し、その藏むるところ、木像、金像、銅像のごとき古佛像より、千種萬種の繪畫、こゝにあつまり、人をして、天上、常に、一色異采の雲氣あるを疑はしめき。その他、鎌倉のごとき、平泉のごとき、もとより、平安寧樂と同日の談にあらざるも、美術界の一方に雄視して、ながく、後

世を照せり。さるに、今は、すなはち、如何。荒烟寒草、滿目蕭條として、寺門破れ、屋瓦落ち、彫刻、繪畫の絶美術は、雨露の漏るゝも、蟲鼠の害するも、これを憂ふるものなきにあらずや。古昔、雄都の址だに、かくの如し。一個人の所藏のごときにいたりては、保存の完全ならざる、知るべきのみ。その甚しきにいたりては、寺院の維持に窮して、千古絶調の寶物を、外人の手に賣却せしものすら、これあり。まして、一個人の所藏のごとき、をしげもなく、海外に流出せしめたるもの、それ、いくばくぞや。今にして、はやく、これが計をなさずば、前途の事、知るべきのみ。

つらつら、現今の美術界を觀察するに、果して、これを振ふ

に足る人士あるか、余は、實に、これを知らざるを愧づるなり。蓋し、大美術家は、百歳二百歳にして、僅に、一二人出づるものにして、もとより、代々に求むべきものにあらざれども、その後塵だに望む能はざるにいたりては、また、遺憾のかぎりにあらずや。今、これが原由をたづぬれば、美術家の、阿堵物に戀戀たるも、その一ならむ。小成に安ずるも、その一ならむ、その他、風潮の然らしむるところもあらむ。需用僅少の致すところもあらむ。されど、その最も大なるは、振興、その法を得ざるにあらむ。

嗚呼、美術品の製作は、わが國民の特有の長技なり。特得の長所なり。山の光、水の影、氣候の調和、風の靜穩、もとより、これが冥助をなすならむも、また、先天の性質、既に、然るにあらざるなきを得むや。苟も、振興、そのよろしきを得ば、以て、わが國民の品格をたかむることを得べきなり。その振興の方策は、如何。

抑も、わが美術品たる、ひとり、古來にわける、歴史の一要素たるのみならず、まことに、國家と、性命を共にするもの、その衰と盛とは、暗々裡に、國家品格の高低如何に關すとせば、これが振興の途、また、實に、國家全體の力を以て、これに當らざるべからず。余輩の考ふるところによれば、まづ、一大國立博物館をたて、一方には、寺社祠宇は、さらなり、一個人所藏の古美術品までも、悉く、こゝにあつめ、以て、篤志家の參觀をゆる

し、一方には、今人の製作にかゝる美術品をかゝげ、以て、來者を勵すにあり。もし、それ、かくのごとくならば、一は、歴史の參照となり、二は、古物の散佚を防ぎ、三は、後進美術家の典型となり、四は、全國民をして、美術の重ずべきを知らしめ、あはせて、高尚靜平の心氣を養はしむるに至らむ。果して、事、こゝに出でむか、豈に、希臘羅馬の古美術をして、美を、前に專にせしめむや。豈に、凱旋門、頌德表をして、壯を、後に擅にせしめむや。

（三宅雪嶺文稿斷雲流水抄錄）

三、自然美

ラスキンの述作は、美術と美術論とをして、通俗ならしめ、自然を觀察する新眼光を、廣く、世人に與へたり。彼の影響は、決して、繪畫社會にとゞまらずして、文學の上には、さらなり、殆ど、畫のなにたるを知らざる社會にまでも、及びたり。蘇人、ピータル、ペーン、嘗て、彼を評して、左の如く、いへり。

自然の美を感受する、卓越せる力を賦與せられ、自然の美を認識する、卓越せる力をもてるものは、山岳にも、聲を與へ、河流にも、音樂を附す。彼、海をながむれば、その海、たちどころに、一しほ、長閑に、うつくしきものとなり、彼、雲をながむれば、その雲、たちまち、一しほ、きらきらしく、かゞやくものとなるなり。彼は、神秘に奉仕する神官にして、自然の慈惠を配分するものなり。さかして、人々、かゝる人を、詩人と

呼ぶ。ラスキンの如きは、かくして、造化の深趣味を解釋して、あまねく、そのゆたかなる恩惠を、人間に傳へたるものなり。彼は、變易せざれども、嶄新なる、老いたれども、そこなはれざる、自然の繪畫につきて、語りたり。この自然の美たる、諸の美術の承認するところ、また、諸の美術の原因するところなれど、常に、吾人の眉間にありて、幼少の時より、かはらざれば、吾人、往々、輕々しく、そのうつくしきを看過せむとす。彼、吾人に向ひて、曰く、「ホーマルの時代にひとしく、薔薇花なす朝の色は、今も、なほ、曉ごとに、新しく、珍しきまひを有す」と。また、曰く、「朝ぼらけが、大海原に添うて、進みゆくや、海原の水の花は、今も、なほ、常に、黃金色と薔薇花との新しき刺繡をもて、盛飾せらる」と。彼は、また、何人も、え爭ふまじき證を擧げて、示して、曰く、「まことに、自然美を愛すらむものは、清水のわきいづるあたり、若葉の茂れるほとりにて、陽春の來れるに遭遇せば、常に、未曾有の美を認めざるを得じ」と。一たび、ラスキンの聲に呼び起さるゝや、吾人は、忽然と、宇宙の美と大とに關する新意識を感じ、宇宙のなにたるかを、更に、明に、思念し、いかに、宇宙をながむべきかを知るなり。

このペーンの評をもて、多少、溢美の傾ありとするも、英の詞壇の寥々たる時に當りて、この評を領し得むものは、他に、一人もあらざるべし。ラスキンの勢力は、實に、詩人としても、批

評家としても、ふたつながら、大なり。新畫風の、英國に起りしも、或は、れもに、彼が影響なりといふを得べきか。（坪内雄藏著文學その折々）

四、藝術家の逸話二章

一、川成と飛驒工

今は昔、百濟の川成といふ繪師ありけり。世にならびなき者にてありけり。瀧殿の石も、この川成が、たてたるなりけり。同じき御堂の壁の繪も、この川成が、かきたるなりけり。然るあひだ、川成、從者の童をにがしけり。東西を求めけるに、求め得ざりければ、ある高家の下部を傭ひて、語りて、曰く、「れのれが、年ごろ使ひつる從者の童、既に、逃げにけり。尋ねて、捕へて得させよ」と。下部の曰く、「やすき事にはあれども、童の顔を知りたらばこそ捕らめど、顔を知らずしては、いかでか搦めむ」と。川成、「實に、さる事なり」と、いひて、たゝう紙をとりいでて、童の顔のかぎりを書きて、下部に渡し、「これに似たらむ童を、捕ふべきなり。東西の市は、人、集る所なり。そのほとりに行きてうかゞふべきなり」と、いへば、下部、その顔の形をとりて、即ち、市に行きぬ。人、極めて、多かりといへども、これに似たる童なし。しばらく居て、もしやと思ふほどに、これに似たる童出で來ぬ。その形を取りいでて、くらぶるに、露、たがひたる所なし。これなりけりと搦めて、川成が許に、ゐて行きぬ。川成、これを

得て見るに、その童なりければ、いみじく喜びけり。その頃、これを聞く人、いみじき事になむいひける。

然るに、その頃、飛驒の工といふ工ありけり。都うつしの時の工なり。世にならびなき者なり。武樂院は、その工の建てたれば、めでたきなるべし。然るあひだ、この工、かの川成となむ、れのれの、そのわざを挑みける。飛驒の工、川成に曰く、「わが家に、一間四面の堂をなむたてたる。れはして見給へ。又、壁に繪など書きて得させ給へ」となむ思ふ」と、互に、挑みながら、中よくてなむ、戯れければ、かくいふ事なりとて、川成、飛驒の工が家に行きて見れば、實にをかしげなる、小さき堂あり。四面に、戸、皆、開きたり。飛彈の工、「かの堂に入りて、その内、見給へ」と、いへば、川成、椽に上りて、南の戸より入らむとするに、その戸、はたと閉づ。驚きて、めぐりて、西の戸より入らむとすれば、又、その戸、はたと閉ぢて、南の戸は、開きぬ。然れば、北の戸より入らむとすれば、その戸は、閉ぢて、西の戸は、開きぬ。また、東の戸より入らむとすれば、その戸は、閉ぢて、北の戸は、開きぬ。かく、まはりまはりて、あまたゝび、入らむとするに、閉ぢつ、開きつ、入る事を得ず。わびて、椽より下りぬ。その時に、飛驒の工、笑ふこと、かぎりなし。川成、ねたしと思ひて、歸りぬ。

その後、日ごろ經て、川成、飛驒の工が許にいひやるやう、「わが家にれはせ。見せ奉るべき物なむある」と。飛驒の工、定めて、我をたばからんずるなめりと思ひて、行かぬを、たびたび、懇

に呼べば、工、川成が家に行きて、かく、來れるよしをいひ入れたるに、「こなたに入り給へ」と、いはしむ。いふに從ひて、廊のある遣戸をひきあけたれば、内に、大きなる人の、黑み脹れ腐りたる、臥せり。臭き事、鼻に入るやうなり。思ひがけずに、かゝる物を見たれば、聲を放ちて、をめきて、去り歸りぬ。川成、内に居て、この聲を聞きて、笑ふこと、かぎりなし。飛驒の工、れそろしと思ひて、土に立てるに、川成、その遣戸より、顏をさしいだして、「やれのれ、かくありけるは、ただ來れ」と、いひければ、れづれづ、よりて見れば、障紙のあるに、早う、その死人の形を書きたるなりけり。堂には、はかられたるが、ねたきによりて、かく、ものたるなりけり。二人の者のわざ、かくなむありける。

その頃の物語には、萬のところに、これを語りてなむ、皆人、ほめけるとなむ、語り傳へたるとなり。（今昔物語）

二、蟬丸と源博雅

今は、昔、源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の、兵部卿克明親王と申す人の子なり。萬の事、やんごとなかりけり。中にも、管絃の道になむ、いみじかりける。琵琶をも、めでたく、彈きけり。笛をも、えならず、吹きけり。この人、村上の御時の殿上人にてありけり。その時に、會坂の關に、一人の盲、庵を造りて、住みけり。名をば、蟬丸とぞいひける。これは、敦實と申しける式部卿の宮の、雜色にてなむありける。その宮は、宇多法皇の御子にて、管絃の道に、いみじかりける人なり。年頃、琵琶を

彈き給ひけるを、常に、聞きて、蟬丸、琵琶をなむ、微妙にひく。

然るあひだ、この博雅、この道を、あながちに、好みて、求めけるに、かの會坂の關の盲、琵琶の上手なるよしを聞きて、かの琵琶を、極めて、聞かまほしく思ひけれども、盲の住家、ことやうなれば、行かずして、人を以て、内々に、蟬丸にいはせけるやう、「など、思ひかけぬ所には住むぞ。京に來ても、住めかし」と。盲、これを聞きて、その答をば、せずして、曰く、

世の中は、とてもかくても、過してむ。
みやもわらやも、はてしなければ、

と、使、歸りて、このよしを語りければ、博雅、これを聞きて、いみじく、心にくゝれぼえて、心に思ふやう、「我、あながちに、この道を好むによりて、必ず、この盲にあはむと思ふ心深し。盲、命あらむことも、はかりがたし。又、我も、命を知らず。琵琶に、流泉、啄木といふ曲あり。こは、世に絶えぬべき事なり。たゞ、この盲のみこそ、こを知りたるなれ。かまへて、これが彈くを聞かむ」と思ひて、夜、かの會坂の關に、行きにけり。

されども、蟬丸、その曲を彈く事なかりければ、その後、三年のあひだ、夜々、會坂の盲が庵のあたりに行きて、その曲を、今や彈く、今や彈くと、竊に、立ち聞きけれども、更に、彈かざりけるに、三年といふ、八月十五日の夜、月、少し、うはぐもりて、風、少し、うち吹きたりけるに、博雅、「あはれ、今夜は、興あり。會坂の盲、今夜こそ、流泉、啄木は、彈くらめ」と、思ひて、會坂に行きて、立ち

聞きけるに、盲、琵琶をかきならして、物あはれに、思へるけしきなり。博雅、これを、極めて、嬉しく思ひて、聞くほどに、盲、獨、心をやりて、詠じて、曰く、

あふさかの、關の嵐の、はげしきに、
ゐひてぞゐたる。世をすごすとて、

とて、琵琶をならすに、博雅、これを聞きて、涙を流して、あはれと思ふこと、かぎりなし。盲、ひとり言に曰く、「あはれ、興ある夜かな。今夜、心えたらむ人の、來よかし。物がたりせむ」と、いふを、博雅、聞きて、聲をいだして、「都にある博雅といふものこそ、これに來たれ」と、いひければ、盲の曰く、「かく申すは、誰にかれはする」と。博雅の曰く、「我は、ゐかゐの人なり。あながちに、この道を好むによりて、この三年、この庵のあたりに來つるに、幸に、今夜、汝にあふ」と。盲、これを聞きて、喜ぶ。その時に、博雅も、喜びながら、庵の内に入りて、かたみに、物語などして、博雅、「流泉、啄木の手を聞かむ」と、いふ。盲、「故宮は、かくなむ彈き給ひし」とて、くだんの手を、博雅に傳へしめてけり。博雅、琵琶を具せざりければ、たゞ、口傳をもて、これを習ひて、かへすがへす、喜びて、曉に歸りにけり。

これを思ふに、諸の道は、たゞ、かくの如く、好むべきなり。それに、近代は、實に、然らず。されば、末代には、諸道に、達者は、すくなきなり。げに、これ、あはれなる事なりかし。蟬丸、いやしき者なりといへども、年頃、宮の彈き給ひける琵琶を聞きて、かく、

きはめたる上手にてありけるなり。それが、盲になりにければ、會坂には居たるなりけり。それより後、盲琵琶は、世にはじまるなりとなむ、語り傳へたるとや。（今昔物語）

五、舊都の月

六月九日の日、新都の事始、八月十日の日、上棟、十一月十三日、遷幸と定めらる。舊き都は、荒れゆけど、今の都は、繁昌す。あさましかりつる夏も暮れて、秋にも、既に、なりにけり。秋も、やうやう、半になり行けば、福原の新都にましましける人々、名所の月を見むとて、或は、源氏の大將の昔の跡を忍びつゝ、須磨より明石のうらづたひ、淡路の迫門をわたり、繪島が

磯の月を見る。或は白浦、吹上、和歌の浦、住吉、難波、高砂、尾上の月の曙を眺めて、歸る人もあり。舊都に殘る人々は、伏見、廣澤の月を見る。中にも、德大寺の左大將實定の卿は、舊き都の月を戀ひつゝ、八月十日あまりに、福原よりぞ上り給ふ。

何事も、皆、變りはてゝ、稀にのこる家は、門前草、深くして、庭上、露、茂し。蓬が杣、淺茅が原、鳥のふしどと荒れはてゝ、蟲の聲聲うらみつゝ、黃菊紫蘭の野邊とぞなりにける。今、故鄕の名殘とては、近衞が原の大宮ばかりぞましける。大將、その御所へまゐり、先づ、隨身を以て、惣門を叩かせらるれば、內より、女房の聲にて、「誰ぞや、蓬生の露、うちはらふ人もなきところに」と、咎むれば、「これは、福原より、大將殿の御のぼり候ふ」と、

申す「さ、はべらば、惣門は、錠のさゝれて候ふぞ。東の小門より入らせ給へ」と、申しければ、大將「さらば」とて、東の小門よりぞ參られける。大宮は、御つれづれに、昔をや思し召し出でさせ給ひけむ、南面の御格子上げさせ、御琵琶遊されけるところへ、大將、つと、まゐられたれば、暫く、御琵琶をさしれかせ給ひて、「夢かや、現か、これへ、これへ」とぞ、仰せける。源氏の宇治の卷には、優婆塞の宮の御女、秋の名殘を惜みつゝ、琵琶を調べて、夜もすがら、心をすまし給ひしに、有明の月の出でけるを、猶、足らずや思しけむ、撥にて招き給ひけむも、今こそ思し召し知られけれ。

待宵の小侍從と申す女房も、この御所にぞ侍はれける。大將、この女房を呼び出でて、昔今の物語どもし給ひて、後、小夜も、やうやう、更け行けば、舊き都の荒れゆくを、今樣にこそうたはれけれ。

ふるきみやこを、　きて見れば、
あさぢが原とぞ、　なりにける。
月のひかりは、　くまなくて、
あきかぜのみぞ、　身にはしむ。

と、れしかへし、れしかへし、三返、うたひすまされたりければ、大宮をはじめ奉りて、御所中の女房たち、皆、袖をぞぬらされける。さる程に、夜も、やうやう、明け行けば、大將、いとま申しつつ、福原へぞ歸られける。（平家物語）

六、想夫戀（詠者不知）

みねのあらしか、　まつ風か、
たづぬる人の、　琴の音か、
駒をひかへて、　きくほどに、
つまれとぶるき、　想夫戀。

七、鎌倉時代にれける余が感想その一

野史稗史をむさぼり讀みし頃の頭腦に、多少の印象を殘したりし、眞假くさぐさの人物の中に、その後、そこばくの變化を經て、今も、なほ、殘れるは、北條時政が後ぞひ、牧の方の面影なり。余が、はじめて、この女性を知りしは、高井蘭山が演義、星月夜顯晦錄にして、そを强めしは、曲亭馬琴の作、朝比奈巡島記なり。みづからは、さばかりとも、氣づかざりしが、この二作家の、筆のあやは、わが幼稚なる頭腦に、淺からぬ印象を與へたりとれぼしく、口繪、挿繪なる面影は、數年の後までも、目に殘りぬ。

去年、桐一葉を完了せし前後より、よりよりに、正史、野乘、記錄、小說のいづれを問はず、牧の方に緣あるものを求めて讀み、もしくは、曾て、讀みし書をも、くりかへして、讀むほどに、牧の方は、いつか、よそになりて、みだりがはしき當時の世態、保元、平治の亂倫、鎌倉三代の罪惡史など、目にとまり、胸に徹る

ことぞれほかる。

○白河、鳥羽、兩院の御ふるまひ、崇德院の御あやまち、義朝父子の悲劇、平家盛衰の大叙事詩、右大將がトラヂ、コメヂー、鎌倉三代間の因果應報、ひいては、承久の大亂まで、まことに、これ、造化自然の大悲劇詩、もし、紙背に徹るといふ史眼ありて、應報の隱微を讀むことを得ば、何物か、造化の大作家たるを否み得べき。因緣果報の理脈、彰乎として、掌紋を指すがごとく、これを讀む輩をして、れぼえずも、れそれ戰かしめ、やがて、肅然として、襟を正さしむ。かの足利史をもて、最暗黑なる國史の部分なりと、思へるものは、れそらくは、ひとり、勤王の觀察點より、わが帝國史を讀める批判家ならむか。心理的方面

より觀察せば、二千五百五十餘年の過去中、最も、かなしむべき、最も、いたむべき、最も、れそるべき、罪惡史は、白河院の御宇に萌して、長く、綿々たる業因をひき、かの愚管抄の著者をして、「道理以外なり」と、暗示せしめし、承久の亂にいたりて、一頓挫せるにあらざるか。さかして、その罪惡史の絶頂は、蓋し、頼朝が死後にれける、鎌倉將軍家の二代史なるべし。

見よ、右大將が墳墓の土は、なほ、いまだ、乾かざるに、嬖臣梶原景時父子が、飛ぶ鳥をも落すべかりし暴威、たちまちに、春の泡雪と消えて、その一族郎黨五十餘人、駿州清見が關の夕嵐に、屍の算を亂し、二代將軍の劈頭に、まづ、大悲劇の緒端をひらけば、これを、無慚の口給として、陸續展開し來る活修羅

の繪卷物、尼御臺所の依怙偏執、北條父子が陰險、賴家が蕩佚、補弼比企能員が野心、その露見、その滅亡、これに連座したる一幡が非業の死、賴家禪室が幽閉、その無慚なる浴室の最後等、正史の表のみを見る時は、いづれも、自招自致の業因にして、頗る、單純なる應報たるに似たれど、これを、心性史の方面より見れば、因緣果報の關聯、甚だ、複雜なるものあり。かの賴家をして、酒色に溺れしめ、蹴鞠に耽らしめ、政務を怠らしめ、惰弱蕩逸に沈湎せしめしもの、豈に、ひとり、彼が性の失のみならむや。

八、鎌倉時代にわける余が感想その二

さもあれ、かくのごときは、余が所謂、鎌倉罪惡史の一斑のみ。否、むしろ、保元以後、連綿として、斷絶せざる一大罪惡鎖の一環のみ。さて、これにつぎてこる修羅鬪諍の慘劇、何ぞ、それ慘絶なる。仁田忠常が寃死の悲劇、畠山重忠父子、一族郎黨が無慚の最後、稻毛入道重成が自業自得の末路、牧の方が奸計、時政が老耄、その逆謀、その露見、その退隱、平賀朝雅があへなき滅亡、泉親衡、和田胤長等の不運なる陰謀、その失敗、和田一門と北條義時との軋轢、首府の中央にての血雨劒電、前者の族滅、後者の全盛、深意ありげなる右大臣の遊惰、ひきつゞく天變地妖、惡禪師公曉があさはかなる暴擧、れよび、その神速なる伏誅、その他、この間に點綴せる幾多無慚なる小悲劇、

もしくは、准悲劇、文覺上人が末路、六代御前の横死、熊谷直實が頓悟の動機など、もし、前代まで、さかのぼりて、種々の業因を算し來らば、殆ど、僂指するに堪へざらむ。嗚呼、何等のわびたゞしき惡因惡果ぞ。時間は、僅々十有七八年、しかも、この期の活史乘を繙かむに、血痕の斑々たらざるページ、果して、幾何かあらむ。

余は、いさゝか、東西の革命史を讀めり。革命期にともなふ罪惡は、嘗て、聞知せるところなり。豈に、罪惡の連續せるためにのみ、當期の史にわどろかむや。余は、その業因の、遠くして深きにわどろき、また、その亂倫の、甚しきにわどろく。革命の前後には、罪惡ならびれこるならひとは、いひながら、倫常の、

かくまでに腐れて、高きは雲の上のたふときより、低きは、地下のいやしきにいたるまで、ひたすら、私慾にのみ執着して、親子相殺し、兄弟相屠り、君を弑し、親族を虐げ、義理をも、人情をも、わすれはてたるなど、うゐたる狗の、腐肉をあらそへるに、さも似たり。

當代の叙事詩たる平家物語が、祇園精舎の鐘の聲に、その悲哀譚の筆をわこし、六道輪廻の章に、卷を了へたる、長明が方丈記に、當代の苦叫をもらし、西行が、山家集に、ひとり世を避け、無名氏が、愚管抄に、道理を說けるも、げにとこそ思はれ。嗚呼、世は、擧げて、禽獸となれりしか。そもそも、また、この間にも、幾多人情の濃淡はありしか。余は、他の、世間尋常の讀史

家が、平然として、當代の史記を讀み、志かも、亂世の一語をもて、この空絶なる暗黑史を蔽ひ、何等の感得せるところもなきをあやしむ。彼等は、人間の、時としては、野獸に墮落するを當然の事となすか。その大墮落の因緣には、何等の感慨をも寄せざるか。余は、從來の史論、そのものゝ、頗る、膚淺なるに驚かざるを得ざるなり。（坪内雄藏著文學その折々）

九、那須與一　その一

沖より、飾りたる船一艘、渚に向つて漕ぎ寄す。二月二十日のことなるに、柳の五重に、紅の袴着て、袖笠かつげる女房あり。皆紅の扇に、日をいだしたるを、杭に挿みて、船の舳頭に立てゝ、これを射よとて、源氏の方をぞ招きたる。この女房といふは、建禮門院の后立の御時、千人の中より撰びいだせる雜司に、玉蟲の前とも、舞の前とも申し、今年十九にぞなりける。雲の鬢、霞の眉、花のかほばせ、雪の膚、繪にかくとも、筆も及びがたし。折節、夕日に耀きて、いとゞ、色こそ增りけれ。かゝりければ、西國までも、召し具せられたりけるを、いだされて、この扇を立てたり。この扇は、故高倉院、嚴島へ御幸の時、三十本切り立てゝ、明神に進奉あり。皆紅に、日いだしたる扇なり。平家、都を落ち給ひし時、嚴島へ社參あり。神主佐伯景廣、この扇をとりいだして、「これは、一人の御施入、明神の御秘藏なり。日は、故院の御情、帝業の御守たるべし。されば、この扇を持たせ給

ひたらば、敵の矢も、反つて、その身に當り候ふべし」と、祝言してまゐらせたりけるを、これを、源氏、射はづしたらば、當家、軍に勝つべし。射れほせたらば、源氏が、勝利なるべし」とて、軍の占形にぞ立てられたる。かくして、女房は、入りにけり。

源氏は、遙に、これを見て、當座の景色の面白さに、目をれどろかし、心をまよはす者もあり。この扇、誰にか射よと、仰せられむと、肝膽を作り、かたづを嚥める者もあり。判官、畠山を召す。重忠は、木蘭地の直垂に、梻細目の鎧着て、大中黒の矢負ひ、所籐の弓の眞中取り、黒の馬の、太く逞しきに、金覆輪の鞍れき、判官の弓手の脇に進み出で、畏つて候ふ。義經は、女にめづる者と平家にいふなるか。かく、構へたらば、定めて進み出で、

興に入らむところを、よき射手を用意して、眞中さし當て、射落さむの、たばかり事と心得たり。あの扇射られなむや」と、宣へば、畠山、畏つて「君の仰、家の面目と存ずる上は、仔細を申すに及ばず。但し、これは、ゆゝしき晴の□なり。重忠、打物取つては、鬼神といふとも、更に、辭退申すまじ。地體、脚氣の者なる上に、この間、馬にふられて、氣分をさし、手あばらに覺え侍り。射損じては、私の恥は、さる事にて、源氏一族の御瑕瑾と存ず。他人に仰せよ」と、申す。畠山、かく、辭しける間、諸人、色を失へり。判官は、「さて、誰かあるべき」と、尋ね給へば、畠山「當時、味方には、下野國の住人、那須太郎助宗が子に、十郎兄弟こそ、かやうの小物は、さがしく仕り候へ。彼等を召さるべし。人は、ゆるし候は

ずとも、強弓、遠矢、打物などの時は、仰を蒙るべし」と、深く、申し切つたり。「さらば、十郎」とて、召されたり。かちんの直垂に、洗革の鎧に、片白の冑、二十四指したる白羽の矢に、笛籐の弓の、塗り籠めたる眞中取つて、渚を下りにさしくつろげてぞまゐりたる。判官、「あの扇仕れ」と、仰す。「御諚の上は、仔細を申すに及ばねども、一谷の岩石を落ちし時、馬弱くして、弓手の臂を、沙につかせて侍りしが、灸治も、いまだ、癒えず、小振して、定の矢仕りぬとも存ぜず。弟與一、冠者は、小兵にて侍れども、かけ鳥、的など、はづるゝは、稀なり。定の矢仕るべしと存ず。仰せ下さるべし」と、弟に讓りて、扣へたり。「さらば、與一」と、召されたり。

一〇、那須與一 その二

與一、その日の裝束は、紺村濃の直垂に、緋威の鎧、鷹角反冑を、猪頸に着なし、二十四指したる中黒の矢負ひ、滋籐の弓に、赤銅造の太刀をはき、宿赫白馬の、ふとくたくましきに、洲崎に、千鳥の飛び散りたる具鞍れきて、乘つたりけるが、進み出でて、判官の前に、弓取りなほして、畏れり。「あの扇仕れ。晴の所作ぞ。不覺すな」と、宣ふ。與一、仰承り、仔細申さむとする所に、伊勢三郎義盛、後藤兵衛尉實基等、與一を、判官の前にひき居ゑて、「面々の故障に、日、既に、暮れなむとす。兄の十郎指し申す上は、仔細やあるべき。とくとく、急ぎ給へ。海上、暗くなりなば、ゆゆしき御方の大事なり。はやはや」と、いひければ、與一、まことと

にと思ひ、冑をばぬぎ、童に持たせ、揉烏帽子ひき立てゝ、薄紅梅の鉢巻して、手綱かいくり、扇の方へぞうち向ひける。生年十七歳、色白く、小髭生ひ、弓の取りやう、馬の乘りかた、優なる男にぞ見えたりける。

波うち際に、うち寄せて、弓手の沖を見渡せば、主上をはじめ奉り、國母建禮門院、北政所、方々の女房達の御船共、その數、漕ぎ並べ、屋形屋形の前後には、御簾も、几帳も、さゝめきけり。袴溫卷の座までも、楊梅桃李と飾られたり。鹽風に誘はるゝ虛燒は、吾妻の袖にぞ通ふらし。妻手の沖を見渡せば、平家の軍將、屋島大臣をはじめ奉り、子息右衛門督清宗、平中納言教盛、新中納言知盛、修理大夫經盛、新三位中將資盛、左中將清經、

新少將有盛、能登守教經、侍從忠房、侍には、越中次郎兵衛盛嗣、惡七兵衛景清、江比田五郎民部大輔等、みな、甲冑を帶して、數百艘の兵船を漕ぎ並べて、これを見る。水手楫取に至るまで、今日をはれとぞふるまひたる。うしろの陸を顧みれば、源氏の大將軍大夫判官をはじめて、畠山庄司次郎重忠、土肥次郎實平、平山武者所季重、佐原介能澄、子息平六、能村、同十郎能連、和田小太郎義盛、同三郎宗實、太田和四郎能範、佐々木四郎高綱、平左近太郎爲重、伊勢三郎義盛、横山太郎時兼、城太郎家永等、源氏大勢にて、轡を並べて、これを見る。定の當を知らざれば、源氏の兵、各、手をぞ握りける。されば、沖も、渚も、れしなべて、いづれも、晴とれもひけり。

一一、那須與一 その三

そこしも、遠淺なり。鞍爪、鎧の菱縫板の浸るまで、うち入りたれども、沛芟の馬なれば、海の中にて、はやりけり。手綱をゆりすゑ、ゆりすゑ、鎭むれども、寄する小波に、物怖して、足も止めず、狂ひけり。扇の方を、きつと見れば、折節、西風吹き來て、船は、艫舳も動きつゝ、扇、杭にもたまらねば、くるりくるりと廻りけり。いづれの所を射るべしともれぼえず。與一、運のきはめと悲しくて、眼をふさぎ、心をまづめて、「歸命頂禮、八幡大菩薩、日本國中大小神祇、別しては、下野國日光宇都宮氏御神那須大明神、弓矢の冥加あるべくば、扇を、座席に定めて給へ。源

氏の運も、きはまり、家の果報も、つくべくば、矢を放たぬ前に、ふかく、海中に沈め給へ」と、祈念して、目を開きて、見たりければ、扇は、座にぞ靜れる。

さすがに、物の射にくきは、夏山の茂き綠の木の間より、僅に見ゆる小鳥を、殺さずして射るこそ大事なれ。挾みて立てたる扇なり。神力、既に、指し副ひたれば、手の下なりと思ひつつ、十二束二伏の鏑矢を拔きいだし、爪やりつゝ、滋籐の弓、握太なるに、うちくはせ、よつ引き、ぢばし、固めたり。源氏の方より、「今少し、うち入り給へや」と、いふ。七段ばかりを隔てたり。扇の紙には、日をいだしたれば、恐あり。かなめのほどをと、心ざして、ひやうと放つ。浦響くまで鳴り渡り、蚊目より、一寸れき

て、ふつと射きりたりければ、かなめは、船に留りて、扇は、空に上りつゝ、ほばし、宙にひらめきて、海へ、颯とぞ入りにける。

折節、夕日に輝きて、波に漂ふ有樣は、龍田の山の秋の暮、河瀨の紅葉に似たりけり。鳴矢は拔けて、潮にあり。澪の浮洲と覺えたり。平家は、舷をたゝきて、女房も、男房も、あ射たり射たりと、感じたり。源氏は、鞍の前輪、籠をたゝきて、射たり射たりと、譽めにけり。（源平盛衰記）

一二、荒野の末

石川依平

○

ものゝふの、いのちを露と、あらそひし、
あらのゝ末に、あきかぜぞふく。

加納諸平

○

笠置山、あすのゆぐれを、さきだてゝ、
みだるゝ雲に、あらしふくなり。

飯田年平

○

こしかたは、とほくかすみて、春草の、
青野がはらに、きゞすなくなり。

土岐光秋

○

ふき下す、木の葉も見えて、俱利加羅の、
山かげさむき、ゆふあらしかな。

山田百枝

○

こゝをせと、たちあらそひし、武士の、
その名ながるゝ、うぢの川なみ。

一三、源平二氏の衰運

源平の世は、あはせて、五十四年、興亡の跡、大かた、一樣にして、ことに、平氏の滅亡は、藤氏失權の面影にも似たり。

平氏は、はじめ、源氏とれなじく、武人の長となりて、北面に候したりしに、保元平治の戰功を經て、藤氏にかはり、政權を掌握せしかば、とみに、上臈となりて、武人の性質をかへ、刀をすて、笏をとり、甲冑をぬぎ、長裾をひき、齒をそめ、黛をゑがき、詠歌に耽り、音樂を好みしほどに、櫻花を挿して、青海波を舞

へば、人、みな、その風流閑雅に感じ、拍手喝采して、櫻梅少將と呼びなしたり。

されば、烏帽子の矯めやうも、一種、六波羅の新樣をいだして、四季の御所には、雪月花の宴をひらき、一門の榮花には、三十餘州の膏血を絞り、平氏にあらざれば、人にあらずと、誇りて、武人を輕じ、武士をいやしめ、「宮人は、宮人どち」と、樂器を、戰場にも携へ、短册を、鎧袖にも挿みて、詩歌管絃の遊は、陣中にてもやめざりし間、喊聲、天に震ひ、人馬、狂奔して、一谷城、みすみす、陷るにも、城中、悠然として、音樂を奏しつゝ、敵をも、既に、泣かしめたれば、味方にも、泣くものあるべく、平氏を仰ぐ武士、漸く、減りて、東北は、悉く、叛き、西南にも、叛者出で來れども、

上臈は、干戈になれねば、維盛は、戰はずして奔り、宗盛も、沈まずして、虜となり、仁安よりこなた、二十年の榮花、遂に、重盛が一睡の夢となりて、源氏一統の世とはなりにしが、源氏も、また、平氏の如く、頼朝は、武人にして起り、實朝は、上臈にして滅びぬ。

そもそも、當時は、武人の世にして、武人を治むるやがて、世を治むるなれば、武人の心を獲るもの、政權をも得ぬべきは、當然の理にて、武人を治め、政權を執るも、必ずしも、源平二氏にかぎるにあらざれば、頼朝は、高位高官を貪らず、つとめて、武人の心を攬りて、武人と、ともに、進退せしが、實朝にいたりては、また、藤氏の宮人にならひ、平氏の公卿をまなびつゝ、朝夕の遊には、鞠を蹴、歌を詠み、かたへは、佛説にまどはされて世務をもかへりみざりしほどに、いつしか、政權、退轉して、頼朝が、平氏の後を相續せし以來、三十五年を經て、遂に、また、北條氏に移れり。（物集高見著日本文明史略）

一四、月夜逗子より友人に寄する書

いつの間にやら、秋風、身にしむ頃と相成り候ふ。憂なきこの心は、物の悲しさを覺えず、れもまろく、うれしく、樂しく、くらし居り候ふ。

去る八月二十六日は、舊曆の七月既望に當り候へば、晩餐の箸を投じ、大なる麥藁帽を戴き、悠々然として、逗子の濱邊

を過ぎ、養神亭なる友人の寓を訪れ候ふ。

かくて、相携へて、三崎街道に沿ひ、鐙摺山にいたり候ふ。この山は、頼朝が三浦出陣の時、こゝにて、鐙をすりし故に、かく、名づけたりと、口碑に存し居り候ふ。三浦義盛、畠山重忠と合戦の時、こゝに、陣をとりしよし、源平盛衰記に見え候ふ。

文明の恩澤は、この山の絶壁を切り下げ、海に沿うて、馬車をも馳せ得べき、大道を開き候ふ。位置は、小高くして、海上に斗出し、逗子灣を隔てゝ、小坪岬と相對し、恰當の觀月臺に候ふ。やがて、月は、鐙摺山の背より出でくれば、海上、蒼茫として、たゞ、こゝかしこに、月影の反射を見るのみ。當面の富嶽は、雪舟の描ける淡墨畫の如く、恍惚として、まことに、夢の如くに候ふ。不思議なるかな、かねて、見れぼえもなき奇峰、突兀として、富嶽の周圍に立ち並ぶ。こは、上州なる妙義山の飛び來れるにか、さても、れもしろきことよと、篤と、吟味致し候へば、雲にてありしも、をかしく候ふ。

われら二人は、興に乘じ、聯歩快談、はやくも、天地深寂たる、森戸川の橋上にいたり候ふ。月は、まさに、われらの帽簷にきしり上り候ふ。清光は、隈なく、相模洋より、伊豆の島々を照し候ふ。海上に天あり。天上に海あり。月は、海上にあるか。波は、天上にあるか。月と、共に、湧き來る高潮は、寄せて、捲きて、碎けて、散りて、黄金の波となり、白金の涙となり、眞珠の濤となり、錦繡の瀾となり、天地の心をいひやぶる、雄大玄深なる音樂を

奏し候ふ。

森戸川を渡りて、右に折れ、亂松の間を蛇行すれば、やがて、森戸神社に御座候ふ。松林、帶の如く、海上につらなり、林つきて、巖、聳ゆるところ、祠堂あり。幾多の巉巖を隔てゝ、名島と相對し候ふ。先づ、このもよりの絶景の一に候ふ。東鑑を按ずるに、「元暦元年五月十九日、武衛、御濱に逍遙し、由比浦より船に乘り給ひ、杜戸の岸に着き給ふ。御家人等、面々に、舟を飾り、杜戸松樹の下に於て、有小笠懸、是士風也」と、見え候ふ。かれを想ひ、これを憶うて、いとゞ、昔の人の、忍ばれ申し候ふ。「今人不見古時月、今月却經照古人。」古人のなつかしきにつけても、また、行末いかなる人をば照すらむなど、思ひつゝ、歩行致すほどに、いつしか、突渡崎にさしかゝり候ふ。これよりは、井上梧陰先生の別墅も、ほど近し、ついでなれば、門を叩くも一興ならむとて、捷路を取りて、濱邊に下り行き候ふ。

月は、ますます、さえて、潮は、いよいよ、高く、ことに、この邊は、奇礁狂巖、亂立したれば、濤聲凄じきばかりに候ふ。ふと、見れば、かなたの巖上に、大なる鷺の如きもの、たゝずみ居り候ふ。近づけば、人なり。更に、近づけば、あなめづらしや、梧陰先生ならむとは。

かくて、先生に導れて、濱邊の裏門より入り、榻を庭除に移し、婆娑たる松間の月影を眺めつゝ、江湖の漫談に、うち興じ、れぼえず、時刻を移し候ふうち、生憎や、怪雲、月をかすめ來り

候ふ。いざ、さらばと、辭して、濱邊に出づれば、黑紗の如き、雲の絶間より、月こそ、あらはれて候へ。

三五の村舍、今は、死よりも、靜に、眠り候ふ。ひやゝかなる風は、そよそよと、御最後川の汀に叢生したる、蘆洲を吹き渡りて、鬢ともなく、額ともなく、頰ともなく、嘗め候ふ。暗淡たる雲に、彩色せられたる月光は、青白く、六代御前の森の上にかゝり候ふ。御最後川の橋上より眺むれば、かすかなる火光、一つ、二つ、これ、漁燈か、これ、鬼火か、存じ申さず候ふ。宿に歸りて、戸を叩くをりしも、雨點兩三、はらはらと、帽上に墜ち候ふ。草々不宣。（德富猪一郎著天然と人抄錄）

一五、源頼朝論

頼朝の、行家、義經を誅せむとすること、甚だ、いはれなし。はじめ、頼朝、鎌倉に入りしより、すでに、自家を經營する志あり。『されば、東國の豪家を、故なく、誅滅し、また、義廣と戰ひ、義仲をうたむとせし類、悉く、皆、れのれに、害あらむことをれもへばなり。』平氏の暴逆を誅せむよしを稱すといへども、兵を擧げて、四年が間、一騎をして、西せしめず。東國の郡鄕を、ほしきまに、押領して、れのれに功あるものに、割き與ふ。いかでか、これを、朝憲を重ずとはいふべき。『義仲を討ちしも、かれ、すでに、京に入りて、平氏を追ひ落し、朝賞に預りしを、惡めるが故なり。』然るに、義經、その心を得ずして、院中に伺候して、朝賞にあ

づかり、かつ、その兵を用ゐる法、天下に雙なかりしかば、最も、頼朝に忌み思はれしなり。されば、頼朝、常に、かれが兵權を奪ひて、その勢を孤にし、平氏滅びしのちに、これをたふすに、たやすからむことを、はかれり。頼朝、みづから、朝に、二心ある故に、朝に、志あるものを忌めるなり。義經、れのが弟なりといへども、當時、すでに、朝臣に列して、京師の鎭護たり。然るに、これを、輦轂の下に襲殺せむとす。これ、あに、臣たる者のこゝろざしならむや。上皇の暗弱なるを利して、行家、義經がことを以て、これをそそのかし参らするに、木曾と平氏とを滅しゝ功あるをもてす。されども、はじめに、平氏の兵威を摧きしは、義仲が功なり。遂に、平氏を滅しゝは、義經が功多しといひつべし。義

仲を誅せしことは、法住寺殿をせめ参らせし罪を、問ひしにはあらず、東軍の、京に入りし時、たまたま、かれが、凶悪の日にあひしなり。頼朝、朝の御ために、かれを討ちしといふは、詐れるなり。ある人、れもへらく、「義經、つひに、頼朝にそむきたり。さらば、頼朝の、かれを誅せむとせしこと、理ともいふべし」と。さにはあらず。義經、はじめより、頼朝に、二心なし。たゞ、頼朝の姦計あることを知らず。いにしへ、頼光、頼親、頼信がごとく、義家、義綱、義光がごとく、兄弟、共に、朝の御まもりたるべしとのみ思ひて、頼朝の代官として、義仲を討ち、平氏を破りし後、京師を守護して、院中に伺候せり。さるを、頼朝、不快の氣色ありしかば、いかにもして、その心をとらむと思ひき。されば、範頼、平

氏を破ることのかなはざるに及びて、義經、讃岐に向ひしとき、渡邊にて、風荒く、浪高きに、眞先に、船を出す。大藏卿泰經、これを諫めしに、「義經、ことに、存念あり。一陣にれいて、命をすてむと思ふ」と、いひき。その志、もし、この度の軍に勝つことを得ずば、最初に、討死すべし。もし、勝つことを得ば、頼朝が心も和ぎなむと思ひしにあらざらむや。かくまでに、頼朝がために、心を盡しぬれど、頼朝、さらに、よしと思ふ心もなく、平氏ほろびし日、速に、その兵權を奪ひて、召し還す。この後、數通の起請文を以て、二心なきよしを申しゝかども、さらに、ゆるさず、遂に、討手をさしむけたり。この時、義經、みづから、首刎ねて、その年頃の志をあらはさむには、いさ知らず、その餘は、みづから、死を救ふべき謀をいたさむにはまかじ。義經、院宣を申し請けしこと、やむことを得ざるに出でたり。その志のごときは、憐むべし。ある人、また、れもへらく、「義經、その志驕りて、勇をたのみ、みづから、その禍をとれり。かつ、加ふるに、景時が讒を以てす」と。これも、また、頼朝に黨する說なり。範頼が、愿にして怯なるも、遂に、死をまぬかれず。その死せし時、誰か、かれを讒せし。れもふに、たゞ、頼朝がごときものゝ弟たらむこと、最も、難しといふべきなり。（新井白石著讀史餘論）

一六、宇治河の先陣　その一

折節、關東にはと披露しけるは、院は、去年十一月一日、西國

へ御門出と聞えたり。これは、木曾義仲、都にて、狼藉、斜ならず、人民、牢籠して、貴賤、やすきことなし。平家は、官位高く、太政大臣左右の大將にあがり、顯官顯職して、卿相雲客に列りき。ただ、奢れるばかりにこそありしかども、さすが、君臣上下の誼を箴し、禮節仁義の法を篤うせりき。「無下に、交代れとりしたる源氏なりけり。舊臣ゆかし」とて、思し召したつとぞ聞えける。兵衞佐、大に、驚き給へり。木曾と平家と一になり、九國、四國、南海、西海、與力同心せば、天下を鎭めむこと、たやすかるべからず。まづ、義仲を追討して、逆鱗をやすめ奉り、その後、平家を亡すべしとて、六萬餘騎をさしのぼす。鎌倉殿の侍所にて、評定あり。「合戰の習、敵に向ひ、城を落すは、案の内なり。大河を前にあて、兵を落さむこと、ゆゝしき大事なり。都に近き近江國には、勢多橋、その流の末に、山城國には、宇治橋、二の難處あり。定めて、橋は、引きぬらむ。河は、深くして、流、荒し。なべての馬の渡すべき川にあらず。その上、河中に亂杭、逆茂木打ち、水の底に、大綱張り流しかけぬらむ。良馬どもを支度して、宇治勢多を渡して、高名あるべし」とぞ、議せられける。かゝりければ、大名、小名、黨も、高家も、面々に、その用意あり。この中に、佐々木、梶原、馬に事をぞ闕きたりける。兵衞佐殿には、折節、秘藏の御馬、三匹あり。生嗟、磨墨、若白毛とぞ申しける。磨墨は、陸奥國三戸立の馬、秀衡が子に元能冠者が進せたるなり。太く逞しきが、尾髮、あくまで、揚りたり。この馬、鼻強くして、人を釣りければ、

異名には、町君と附けられたり。生嗟とは、黑栗毛の馬、高さ八寸、太く逞しきが、尾の前、ちと、白かりけり。當時五歳、猶も、いでくべき馬なり。これも、陸奥國七戸立の馬、鹿笛を金燒にあてたれば、すこしも、紛るべくもなし。馬をも、人をも食ひければ、生嗟と名づけたり。

梶原源太景季、佐殿の御前に參りて、「君も御存知ある御事に候へども、弓矢取る身の、敵に向ふ習は、よき馬に過ぎたることなし。健馬に乘りぬれば、大河をも渡し、巖石をも落し、蒐くるも、引くも、たやすかるべし。力は、樊噲、張良が如く强く、心は、將門、純友が如くに猛けれども、乘りたる馬、弱ければ、自然の犬死をもし、永き耻をも見ることに侍り。されば、生嗟を下し預りて、今度、宇治河の先陣を勤めて、木曾殿を傾け奉り候はゞや」と、傍若無人に、憚るところなく申したり。佐殿、やゝ、案じ給ひけるは、「われ、土肥の杉山に、七人、隱れ居たりしに、梶原に助けられて、今、世に出づる事も忘れがたく思ふなり。賜はばやと、れぼしけるが、また、案じて、蒲冠者も、人してこそ所望申しつれ。景季が、推參の所望、頗る、狼籍なり。また、これ程の大事に、馬に事かけたりと申すを、たばでも如何あるべき」と、とかく、案じて、宣ひけるは、「景季、たしかに、承れ。この馬をば、大名小名八箇國のものども、內外につけて、所望ありき。就中、大將軍に差し遣す蒲冠者、眞平に、まかり預らむといひき。然れども、源平の合戰、未だ、落居せず。木曾追討のため、東國の軍兵、大

概、上洛す。知らぬ平家と木曾と、一になりて、大なる騷となりなば、頼朝も、うち上らむ、その時の料にと思ひて、誰々にも、賜はざりき。これは、生嗄にも、相劣らず」とて、磨墨をたびにけり。景季は、生嗄をこそ給はらねども、磨墨、誠に、逸物なりければ、笑を含み、畏りて、罷り出で、墨漆の鞍を置き、舍人、あまた附けて、氣色してこそ、引かせたれ。

明日の辰の始に、近江國住人佐々木四郎高綱、佐殿の館に早參して、所存ある體と覺えたり。兵衞佐、宣ひけるは、「いかに、御邊は、この間は、近江に在國と聞けば、志あらば、軍兵上洛に附きて、京へぞ上り給はんずらむと、相存ずるに、いつ下向ぞ」と、問ひ給ふ。高綱、申しけるは、その事に侍り。去年十月の頃より、江州佐々木莊に居住のところに、かゝる騷動を承れば、誠に、近きにつきて、京へこそ打ち上るべきに、軍の習、命を君に奉りて、戰場に出づる事なれば、再び、歸參すべしと存ずべきにあらず。今一度、見參にも入り、御暇をも申さむため、また、いづくの討手にむかへとも、たしかの仰をも蒙らむ料に、正月五日の卯刻に、佐々木の館を打ち出で、三箇日の程に、鎌倉に下着し侍りき。且は、下向せずして、自由の京のぼりも、その恐ありと存じ、旁の所存によりて、罷り下れり。志は、斯樣に運びたれども、一匹持ち侍りたる馬は、馳せ損じぬ。親しき者といふ、知音と申す人々、面々に打ち立つの間、誰に馬一匹をも尋ね乞ふべしとも、覺えねば、いかゞ仕り侍るべきと、心勞して、

大名小名、既に、上りぬれども、今までは、かくて候ふなり」と、申す。兵衞佐殿は、聞きあへず、「下向、今に始めざる志、神妙々々。抑も、木曾、朝威を輕じ奉るによりて、追討のために、軍兵を差し上す。宇治、勢多の橋、定めて、引きて侍らむ。宇治川の先陣、渡されなむや」と、ありければ、高綱、申しけるは、「近江の生立の者にて候へば、間近き宇治河、深さ、淺さ、淵瀨迄も、委しく、存知仕つて候ふ。彼の手に向ひ候はゞ、宇治川の先陣は、高綱」と、申す。佐殿は、「去ぬる治承四年八月下旬の頃、石橋の合戰に、大庭三郎に追ひ落され、遁れ難かりしに、殿原兄弟、返り合せて、禦矢射て、賴朝が命を助けられき。その時は、日本半分とこそ思ひしかども、世、未だ、落居せず、さしたる事なし。相構へて、今度、宇治川の先陣勸めて、高名し給へ。必ず、相計ふべきなり。賴朝、隨分、秘藏の生嗟、御邊に預け奉る」と、直に、仰を蒙る。高綱は、今生の大御恩、希代の面目、家門の勝事、何事かこれに如くべきと、思ひければ、畏り入りて、馬を賜りて、出でむとするところに、佐殿、宣ひけるは、「この馬、所望の人、あまたありつる中に、舍弟蒲冠者も申しき。殊に、梶原源太、直參して、眞平に、申しつれども、もしもの事あらば、乘りて出でんずればとて、たばざりき。その旨を存ぜられよ」と、仰せければ、高綱、聊も、そゞろかず、座席になほりて、畏り、「宇治川の先陣、勿論に候ふ。高綱、若し、軍以前に死すと聞召さば、先陣は、はや、人に渡されけりと、思し召さるべし。軍場にて、存命と聞し召さば、宇治河の先陣、高綱渡し

けりと、思し召されよ。若し、他人に、先を蒐けられて、本意を遂げずば、敵は、嫌ふまじ、河端にても、河中にても、引き組んで落し、勝負を決すべし」と、申し定めて、出でにけり。

由井濱に打ち出で、聞きければ、大勢は、大抵、昨日よべに、鎌倉を出でたりといふ。さては、駿河國浮島原の邊にては、追ひ着きなむと思ひて、十七騎にて打ちて、殿原殿原とて、稻村、腰越、片瀨川、砥上原、馳せ過ぎて、相模河を打ち渡り、大磯、小磯、酒勾宿、湯本、足柄、越え過ぎて、引き懸け、引き懸け、打つ程に、その日は、二日路を、一日路に、黃瀨川の宿に着きにけり。

一七、宇治河の先陣 その二

正月十日餘の事なれば、富士の裾野の雪解に、富士の河水增りつゝ、東西の岸を浸したれば、たやすく、渡すべきやうなし。九郎御曹子、兵共に、「この河の水まさりたり。いかゞすべき」と、宣へば、口々に、申すやうは、「宇治、勢多を渡さむ故實のためにも、まづ、この河をこそ、渡して見るべきなれ。されば、馬筏を組みて、渡し候はゞや」と、申す。蒲御曹子、宣ひけるは、「軍の評議をば、土肥次郎に申し合すべしとこそ、佐殿は、仰ありしかば、彼を召せ」とて、召されたり。「いかに、土肥殿、この河の水出でたるをば、なにとかすべき。宇治、勢多のならしに、馬筏を組みて、渡して試みばやと、申すものの多し。相計られよ」と、仰せければ、實平、畏りて、申しけるは、「敵をだに、目に懸けたらば、馬筏にて

も、急ぎ渡すべし。この河は、渚近くして、水の早きこと、征矢をつくよりも、なほ、早し。一引も引き落されなば、馬も、人も、助るべからず。佐殿も、木曾、定めて、宇治、勢多の橋は、引きたるらむ。その川を渡すべしとこそ、御評定はありしか。富士河深き流に、馬をも人をも失ひては、何の詮かはあるべき。敵に逢ひてこそ、命をば捨てめ、いたづらに、水に流れて、身を失ふべきにあらず。これは、雪解の水なれば、きつと、減ることあるべからず。明日、水に心得たらむものを以て、瀬踏せさせて、靜に、渡すべきなり」と、申せば、この議、然るべしとて、大勢、雲霞の如くに、その邊に、下り居たり。

梶原源太は、磨墨に優る馬どもを見るに、九郎御曹子の青海波七寸、蒲御曹子の月輪七寸二分、和田小太郎の白浪七寸五分、畠山の秩父鹿毛七寸八分、これ等を始として、大名小名、五十匹、三十匹、五匹、十匹、引かせたり。されども、磨墨に優る馬なし。源太、大によろこび、一重あがりたるところに居て、引き廻し、引き廻し、愛し居たり。あまりの嬉しさに、人が、ほめよかし、引出物せむと、思ふところに、村山黨の大將に、金子十郎家忠、折節、こゝを通りけり。招き寄せて、「いかに、金子殿、この馬、何法の馬にて候ふぞ。御覽ぜよ」と、いふ。金子は、もとより、勇み狂じたる男なり。うち見て、誑れ笑ひ、「これは、佐殿の磨墨にや。御邊の親父梶原殿、御内には、一人にて御座す。されば、御邊、この馬賜はり給ひにけり。これ程の馬をば、よしとも、あしとも、中

中、詞を加ふること、沙汰の外に侍り。たゞ、時のきら、餘所の人日こそうらやましく候へ」と、ほめたりければ、源太、大に悅びて、小櫻を黃にかへしたる鎧に、太刀一振とりそへて引く。源太は、舍人三人附けて、「摩れよ、はたけよ、飼ひ勞れ」とて、他事なく、これを愛しけり

佐々木四郎高綱は、生嗟に、黃覆輪の鞍置き、白き轡二引兩の手綱結びて、舍人六人附けて、浮島原を西へ向けてぞ引かせたる。原中宿を過ぎ、平々たる春の野なれば、生嗟、斜ならず勇み、身振して、三聲四聲、嘶きたり。鐘をつくが如くなれば、遙に、二里を隔てたる、田子の浦へぞ響きたる。畠山、これを聞きて、「こは、いかに、生嗟の鳴く音のするは、誰人の賜りて、將て來たるやらむ」と、いふ。半澤六郎、申しけるは、これ程の大勢の中に、數千匹遙物ども、多く侍り。何の馬にてかはべらむ。大樣の御事と覺え候ふ。その上、生嗟は、蒲殿、梶原などの申されけれども、御免なしと承る。さては、誰人か賜るべき」と、いへば、人々、げにもと思ひて、あざ笑ひてぞありける。畠山重忠は、「一度も聞き損ずまじ。人に、たびたばずは、知らず、一定、生嗟が音なり。只今、思ひ合せよ」と、いひも果ねば、生嗟は、東の方より、舍人六人、引きもためず、白泡かませて、出で來たり。さてこそ、畠山をば、神に通じたるやらむとも、申しけれ。

源太は、磨墨ほめ愛して居たるところを、舍人ども、生嗟引きてぞ通りける。ゆゝしく見えつる磨墨も、勝る生嗟に逢ひ

たれば、無下にうてゝぞ見えたりける。源太、これを見て、「蒲御曹子の賜はるか。九郎御曹子の賜はるか。よき次とて、院へ進せらるゝか」と、思ひて、郎等を以て、「その御馬は、何方へ参り、いかなる人の馬ぞ」と、問はす。舍人、「これは、佐々木殿の馬」と、申す。「佐々木殿とは、誰ぞ。三郎殿か。四郎殿か」と、問ふ。「四郎殿の御馬」と、答ふ。源太、「口惜しき事にこそ。景季、再三、所望申しつるに、御免なき馬を、高綱にたびけることの遺恨さよ。佐々木にたぶ程ならば、先の所望につけて、景季に賜ふべし。景季に賜ばぬ程ならば、後の所望なり、高綱に賜ぶべからず。大將軍たる人の、源平の大事を前にひかへて、あしくも、偏頗し給へり。これ程の御氣色にては、いかでもありなむ。千世を榮ゆべき世の中にあらず。思へば、電光朝露のごとくなり。いつ死なむも、同じきこと、日頃は、佐々木に宿意なし。時に取りて、日の敵なり。高綱、さる剛者なれば、左右なく、よもせられじ。互に、引き組みて、落ち重り、腰の刀にて指し違ひ、耻ある侍二人失ひ、鎌倉殿に、大損とらせ奉らむ。高綱、景季二人は、一人當千の兵をや」と思ひて、相待つところに、佐々木、いかでか、かくとは知るべきなれば、十七騎にて、さしくつろげて、歩ませきたり。源太は、最後と思ひつゝ、磨墨に乘り、太刀も持たず、刀ばかり指したりけり。遥に、佐々木に目を懸けて、眞横に歩ませ塞ぐ。高綱、これを見て、郎等どもに申しけるは、「こゝに控へたるは、梶原源太と覺えたり。あの景氣を見るに、馬の立てやう、人を待つやう、

直事とは覺えず。生嗄故に、一定、高綱に組まむと思ふ意趣あるらむ。鎌倉殿の意せよとは、この事にこそ。組みて落つるものならば、指し違ひてぞ死なんずらむ。但し、梶原、佐々木、公の馬を論じて、命をすてむこと、人目、まこと、面目なし。陳じてみむに、かなはずして、梶原、我に組むならば、心あれ」と、さゝやきて、うち通らむとするところに、源太、打ち並びていひけるは、「いかに、佐々木殿、遙に、見參し奉らず。あの御馬は、上より賜りてか」と、いひかけて、押し並ぶ。高綱、にこと、うち笑ひて、申すやう、實に、久しく見參し奉らず。去年十月の頃より、近江に侍りつるが、近きにつきて、京へうちのぼるべきに、暇申さでは、その恐あり。また、何方へ向へとの仰を蒙らむと存じて、三日に、

鎌倉へ馳せ下らむと打つ程に、只一匹持ちたりつる馬は、疲れ損じぬ。さては、乘替なし。いかゞすべきと、思ひ煩ひ、御廐の馬一匹申し預らばやと存じて、内々、伺ひきけば、磨墨は、御邊の賜はらせ給ひけり。生嗄は、御邊も、蒲殿も、再三、御所望ありけれども、御許なしと承る。さて、高綱などが賜はらむ事かなひがたし。中々、申さむも、尾籠なりと存じて、心勞せし程に、山井の濱の勢揃にもはづれぬ。さて、又、馬なしとて、留るべきとにもあらず。いかゞせむと、按ずるほどに、抑も、これは、君の御大事なり。後の御勘當は、左右もあれ、盜みて乘らむと思ひて、御廐の小平次に、心を入れ、盜みいだして、夜にまぎれ、酒匂の宿まで遣して、この曉、引かせたり。只今にも、御使走りて、不

思議なりといふ御氣色にや預らむと、閑心なし。若し、御勘當もあらむ時は、去かるべきやうに、見參に入れ給へ」とぞ、陳じたる。源太、まことゝ心得て、「げに、げに、佐々木殿、たやすくも、盜みいだし給へり。この定ならば、景季も盜むべかりけり。正直にては、よき馬は、儲くまじかりけり」と、狂言して、うち連れてこそ、上りけれ。

一八、宇治河の先陣 その三

元暦元年正月廿日、大手、搦手、宇治、勢多に着く。九郎義經、河端に推し寄せ見給へば、橋板を破り取りて、向の岸に、垣楯に拵き、櫓に構へたり。水は、深さ増して、底見えず。その上、亂杭、逆茂木、隙なく打ちて、大綱、小綱、引き張りて、流し懸けたれば、鵞鳴などの水鳥も、たやすく、潜り通るべしとも見えざりけり。川の耳、分内狹くして、打ち臨みたるもの、四五千騎には過ぎず。二萬餘騎は、寄り附くべきところなくして、たゞ、いたづらに、後陣に控へたり。河のさまをも見ず、橋を引きたるも知らぬものゝみ多ければ、渡るべき評定にもれよばざりけり。御曹子は、「雜色歩走の者どもを集めて、家々の資財、雜具、一々、取りいださせて、河端の在家を、悉く、燒き拂ひ、大勢を、一所に集むべし」と、下知し給ふ。このよし、走せ散りてのゝしりけれども、かねて、山林に逃げ隱れたりければ、家々には、人もなし。この上は、手々に、續松を指し上げて、宇治の在家を燒き拂ふ。行

歩にかなはぬ老者少者ども、さりともと、忍び居たりけれども、猛火に焼け死に、たまたま、遁れ出でたれども、馬人に踏み殺さる。まして、牛馬の類は助くる者もなければ、その數を知らず、焼け死にけり。風吹けば、木、やすからず」とは、かやうの事なるべし。廣々と、焼き拂ひたりければ、二萬五千餘騎、のこる者もなく、河耳に臨みたり。

御曹子、河の邊近く、高櫓を造らせて、この上に登りて、四方を下知し給ひけり。矢立の硯を取り寄せて、「宇治河先陣と剛者とを、次第を、明々に注して、鎌倉殿へ見參に入るべし」と、仰せられければ、軍兵、各、勇をなして、忠を抽でむとぞ色めきける。御曹子は、櫓の上にて、さまざまの事、下知し給ひけれども、

大勢、思ひ思ひに、とゞめきければ、うち紛れて、聞えざりければ、平等院の御堂より、大鼓を取り寄せ、櫓の上にて、打ちければ、大勢靜りて、何事やらむと、鳴をまづめて、軍將に、目を懸くる時、大音揚げて、下知し給へけるは、「二萬五千餘騎の勢の中に、海の邊、川端に栖みて、水練の輩多かるらむ。郎等、家子、舍人、雜色までも、かゝる時こそ、群に拔けたる高名をもすれ。我と思はむ者どもは、物具ぬき置きて、瀬踏して、川の案内を試みるべし。向の岸を見るに、矢筈を取りたるもの、四五百騎と見えたり。瀬踏する者あらば、定めて、引き取り、引き取り、射らんずらむ。剛座に附かむと思はむ人々は、馬を捨て、橋桁を渡り、向の岸の軍兵を追ひ拂ひて、水練の輩を、思ふやうに、振舞せ

よ」と、下知せられければ、これを聞き、平山、馬より飛び下り、橋桁の上に走り登り、弓杖を突き、扇、はらはらと仕うて、中しけるは、「二萬五千餘騎のその中に、橋桁先陣の渡は、武藏國住人平山武者所季重といふ小冠者なり」とぞ、名乘りける。抑も、當河の有樣、深淵潭々として、巨海波に浮べるがごとし。下流淼として、瀧水の漲り落るに臨むに似たり。虹の橋桁危うして、雁齒の構、奇しければ、渡り得むこと、難けれども、軍將の下知を背くは、命を惜むに似たり。身をば、宇治河底に沈むとも、名をば、後代の末にながさむとて、平山、これを渡る處に、佐々木太郎定綱、澁谷右馬充重助、熊谷次郎直實、子息直家、已上五人ぞ、續きて、渡しける。矢ごろも近くなりければ、向の岸の軍兵、弓を強く引かむがためにわざと、兜を脫ぎて、思ひ思ひに、引き取り、引き取り、放ちける矢、雨の足の如くに、飛びきたりけれども、甲冑をゆり合せ、ゆり合せ、矢間をたはひて、振舞へば、鎧は、重代の重寶なり、裏かく矢こそなかりけれ。

熊谷、橋桁を渡らむとて、子息の小次郎を招きて、いひけるは、「汝は、今年十六歲、心は、猛く思ふとも、されは、未だ、かたまらじ。直實だにも、平に、渡りつかむこと難かるべし。汝は、大勢の川を渡さむ時、惣を力にして渡るべし」と、敎へければ、小次郎うち咲ひて、「秋の菓にこそ、核の固る固らぬと申すことは侍れ。十歲以後のもの、實の固らぬことやあるべき。若し、固らざらむにつきても、父をば、いかでか離れ奉るべき。恐らくは、父

こそ、常は、風氣とて、目のまふ、膝の振ふとは、仰られ候へこの大河に向ひて、細桁を渡し給はむこと、危く覺え侍る、日まひ足振ひ給はゞ、直家を憑み給へ。渡し申さむ」と、いひければ、父、これを聞きて、「さらばつゞけ、小次郎」とて、親子連れてぞ渡りける。誠の瀨には、子に過ぎたる寶なし。死出の山、三途の河の旅の道も、親子ぞ、互に、助なる。五人の兵、流石、目まひ、足ふるひて、水は、逆に流るゝかとぞ覺えける。各、弓をば、手に懸けて、這這わたる有樣、誠に、餘の命とぞ見えし。熊谷は、我が身の事は、さる事にて、子息の事の心苦しさに、「續くか、小次郎、誤すな。誤すな」と、呼びければ、直家は、「心ゆるし給ひて、落ち入り給ふな。落入り給ふな」とぞ、敎へける。父子の情の哀さに、熊谷は、これ

よりして、發心の思は、ありけりとかや。

さるほどに、直實、大音揚げていひけるは、「抑も、この川、固めたる輩は、木曾殿の樹根の郎等には、よもあらじ。一旦、附き從ひたる人共にこそあらめ。命は、惜しき習なり。詮なき合戰に與力して、大事の命失ふな。落ちば助けむ」と、いふまゝに、引き取り、引き取り、放つ矢に、木曾殿の郎等に、藤太左衛門尉兼助といふ者、逆に、射落されけり。これを始として、水練の者あらば、防矢射むとて、五人進み寄りて、散々に射ければ、多くの郎等、手負ひ、討たれけり。その間に、佐々木が郎等に、常陸國住人鹿島與一とて、無雙の水練あり。鎧脫ぎ置き、褌をかき、腰には、鎌を指し、手には、熊手を持ちて、河の底に入り、やゝ、久しく、沈

みくゞりて、亂杭、逆茂木、引き落し、大綱小綱、切り棄てけり。實の器量と見えたりけり。

されども、未だ、川を渡すものはなし。いかゞあるべきと、評定さまざまなりけるに、畠山庄司次郎重忠、進み出でゝ、申しけるは、「事新し。この川は、近江の湖の末、今はじめて出で來る川にあらず。春立つ日影の習にて、細谷川の氷解け、比良の高根の雪消えて、水のかさは增すとも、水の減ることあるべからず。足利又太郎忠綱も、高倉宮の御謀叛の御時は、渡せばこそ渡しけめ。鎌倉殿の御前にて、さしも、評定のありしは、これぞかし。始めて、驚くべき事にあらず。乘ての馬の用意、その事なり。重忠、渡して見參に入れむ。」と、いふ處に、平等院の小島が

崎より、武者二騎、蒐け出でたり。梶原源太と佐々木四郎となり。景季が裝束には、木蘭地の直垂に、黑革威の鎧に、三枚兜の緒を締め、滋籐の弓の中を取り、二十四差したる小中黑の矢負ひ、練鐔の太刀を佩きて、鎌倉殿の賜びたる磨墨といふ名馬に、黑塗の鞍置きて、騎つたり。高綱は、褐の直垂に、小櫻を黃に返したる鎧に、鍬形打ちたる兜に、笛籐弓の眞中取り、二十四差したる石打の征矢、頭高に負ひ、嗔物造の太刀帶いて、これも、鎌倉殿より賜びたる生嗟に、黃覆輪の鞍置きてぞ騎つたりける。誰か先陣と見るところに、源太、さつと打ち入りて、遙に、先立ちけり。高綱、いひけるは、「いかに、源太殿、御邊と高綱と外に人なければ、かく申す。殿の馬の腹帶は、以外に窕びて

見ゆるものかな。この川は、大事の渡なり。河中にて鞍踏み返して、敵に笑はれ給ふな」と、いひければ、さもあらむと思ひて、馬を留め、鐙踏み張り、立ち上り、弓の弦を口にくはへ、腹帶を解きて、引き詰め、引き詰めて、ままめける間に、高綱、さつと打ち渡して、二段ばかり、先立ちたり。源太、たばかられけりと、安からず思ひて、これも、打ち浸して渡りけるが、馬の足、綱にかゝりて、思ふ樣にも渡されず。高綱は、究竟の逸物に乘りたれば、宇治川、はやしといへども、淵瀨をいはず、さゞめかして、面に渡し、向の岸近くなりて、高綱が馬、綱に懸りて、足をさと歩み除けゝれば、固より期する事なれば、太刀を拔き、大綱小綱三筋、さと切り流し、向の岸へ、打ち上り、鐙踏み張り、弓杖突いて、「佐

佐木四郎高綱、宇治河の先陣渡りたりや」と、名乘も果てぬに梶原源太も、流渡に上りにけり。

源太、佐々木、鎌倉へ、早馬を立て、いづれも劣らじ負けじと、馳せて行く。源太が早馬は、先だちたりけるが、いかゞまたりけむ、足柄の山中にて、高綱が早馬、先だちぬ。三日と申すに、馳せ着きて、「高綱宇治河先陣」と、申したり。同時に、梶原が使、また、來りて、「景季先陣」と、申しけり。右兵衛佐殿、安立新三郎清恒を召して、「佐々木、梶原、生きたりや」と、問ひ給へば、「共に候ふ」と、申す。その後は、尋ね給ふことなし。後日の注進に、宇治河の先陣は、高綱と注せられたりけるを見給ひてこそ、「言と心と相違なし」とは、宣ひける。（源平盛衰記）

一九、古戰場を吊ふ文

軍のにはに、戎衣かいつくろひ、秋の霜に、露の命、きえを爭ふ、武士のならひばかり、悲しきはあらざりけり。あなあはれ。君に仕へて、まめなる志を致さむ人、かならず、孝の人なり。あなあはれ、亂世のあさましき、忠臣孝子、大かた、幸なく、赤きむくろ、さながら、駒の蹄にかけられ、白き骨、鋤かれて、道の草をこやせり。あなあはれ。空しく、ちりひぢと共に、その名埋れけむ人、いくそばくぞや。あなあはれ。鋤き殘したる片岡は、草かるうなゐらも、靈ありなど憚りて、木ぢげき藪、踏み分けたる跡だになし。折れ傾きたる石の卒塔婆、なからは土、なからは苔に埋れて、彫りつけたりけむ文字やうも、その名と共に消えはてにたり。あなあはれ。香華とる人しなければ、うかれし魂、今も、猶、涼しき國へ行きやらで、このわたりにやさまよふらむ。あなあはれ。雨そぼふる宵、月暗き曉、青き火もえ、叫ぶ聲きこゆなど、嫗翁は、かたるぞかし。思ふに、かゝるわたりには、けしからぬ物の、ところえて、さるあやしのわざ見えて、人れどさむとするにこそ。忠臣孝子、君のため、親のためにすてけむ身に、さるさがなき執のこして、めゝしう人に見ゆべしやは。あなあはれ。さる事、いひさわがるゝも、又、幸なきが上の幸なきになむ。あなあはれと、涙さしぐまれて、野中の清水、一ひさごをだに、手向けばやと、塚のほとり、近う、たち寄れば、蟻と

いふ虫の、羽れひたるが、はと、群りかゝりたる耳のほとり、つきれどろかす遠寺の鐘、いと、高うきこえて、あなあはれ。あなあはれ。（井上文雄文稿）

二〇、忠度と俊成

薩摩守忠度は、いづくよりか歸り來られたりけむ、士五騎、童一人、召し具して、五條の三位俊成卿の許にうち寄りて、門を、ほとほとゝ、うち叩き、「忠度と申す者が、歸り入りて候ふ。門をな開かれ候ひそ。この際までたち寄らせ給へ」と、申されたりければ、三位、「さる事あり。その人ならば、苦しかるまじ。入れ申せ」とて、門を開きて、入れ給ひ、對面あり。

忠度の、その日の裝束には、紺地の錦の直垂に、小具足ばかりをぞ給ひたりけるが、事の體、なにとなく、物哀なりけり。薩摩守、申されけるは、「年來、申し承り候ひし後は、れろそかにも、思ひまゐらすることは候はねども、この兩三年は、京都のさわぎ、國々の亂、偏に、當家の身の上にて候ふ間、疎略を存ぜずとは申しながら、常には、參りよることも候はず。抑も、勅撰のあるべきよし承り候ひしに、世のみだれ出で來候ひて、その沙汰なく候ふ。一身のなげきと存ずるに候ふ。君、既に、都を出でさせ給ふ上は、今は、野邊に屍を晒さんずるより外は候はず。もし、世鎭りて後、勅撰の沙汰候はゞ、この中に、さりぬべきもの候はゞ、一首なりとも、御恩は蒙り、草の蔭にても、嬉しと

思ひ奉り候はゞ、遠き御守とこそなり參らせ候はんずれ」と、て、鎧直垂の袖より、卷物を、一つ取りいだし、俊成卿に奉らる。三位、開き見給へば、百首の歌をぞ書かれたる。

三位、「今に始めぬ御事とは申しながら、かゝる急劇の中に、思し召し忘れぬ御志、ありがたく存じ候ふ。勅撰の事にれいては、愚臣が承り候ひぬれば、向後、その沙汰候はゞ、疎略を存ずべからず」と、宣ひければ、薩摩守、大に、喜び給ひて、「今は、野邊に、屍を晒さば晒せ、蒼海の底にも沈まば沈め、今生に思ひ置くこと候はず。この世のわかれこそ、只今ばかりにて候ふとも、來世にては、必ず、一所へ參り合ふべし。さらば、暇申す」とて、出でられければ、三位、薩摩守の後を、遙々と見送り給ひて、涙

をれさへて、立たれたりしに、忠度「前途程遠、馳懷雁山之暮雲」と、高らかに、詠ぜられければ、三位も、いとゞ、哀に思ひて、涙をれさへて、入り給ふ。

その後、世鎭りて、文治のころ、勅撰あり。今の千載集、これなり。この中に、薩摩守の歌一首を入れられけり。志、切にして、優なりければ、あまたも入れたくは、思はれけれども、その身、勅勘の人なれば、世にはそれて、名字をだにもあらはされず、「よみ人知らず」とぞ、入れられける。「故郷の花」といふ題を以て、よまれたる歌なり。

さゞなみや、志賀の都は、荒れにしを、
むかしながらの、やまざくらかな。

その身、朝敵となりにし上は、仔細に及ばずとは、いひながら、口をしかりしことゞもなり。（平家物語）

二一、櫻

○

うららうらと、のどけきはるの、心より、
にほひいでたる、山ざくらばな。　賀茂眞淵

○

世にあれば、ことしの春の、花も見つ。
嬉しきものは、いのちなりけり。　本居宣長

○

香川景樹

大井川、かへらぬみづに、かげ見えて、
ことしもさける、山ざくらかな。　千種有功

○

あはれあはれ、我に千年の、命あらば、
ゆづらまほしき、山ざくらかな。　八田知紀

○

よしの山、かすみの奥は、志らねども、
見ゆるかぎりは、さくらなり鳧。

二二、詩歌論

詩歌は、もと、情より、れこりたるものにして、智力をむねと

せるものにあらず。山水の美、花月の艶、よく、人をして、風流の心をれこさしめ、高尚優美なる感情を發せしむるは、なにぞや。何人といへども、なに故に、山水は美なるか、なに故に、花月は艶なるかと、一々、そのものを分析し、その理由を解得したる後、はじめて、その美をほめ、その艶をよろこぶにあらず。人、勝地にあそべば、たゞちに、その美を感じ、人、花月にむかへば、たゞちに、その艶を感ず。これ、皆、情の作用にして、智の作用にはあらざるなり。さかして、この情の、外にあらはるゝや、れのづから、曲節をもつものにして、一種の風體ある言語を要するなり。故に、情の韻文にれけるは、なほ、智の散文にれけるがごとしといふも、よろしからむ。

かくのごとく、詩歌は、情にもとづくものなり。情は、天下の人、これあらざるはなし。故に、天下の人、皆、多少、詩興をもたざるものなし。かくいへば、天下の人、皆、詩人なるがごとくなれど、さからず。なにとなれば、詩人の詩興感慨は、常人よりも、著大にして、かつ、明瞭なるのみならず、これを、適麗なる文辭にいひあらはして、他人にも、その情感を味はしむるものなればなり。これ、詩人と常人との區別なり。

詩歌は、もと、情にもとづくものなりといへども、後世、人智の進むにさたがひ、智を以て、或は、情を助け、或は、情を制するがゆゑに、詩歌も、また大に、智力の原素をもつにいたれり。ことに、教訓の詩、哲學の詩のごときにいたりては、殆ど、智の作

用にもとづくものともいふべからむ。然れども、韻文の本領は、情にあることと、前にいへるがごとし。これ、詩歌は、いにしへの麁造の社會のものが、絶妙にして、文化の進むにまたがひ、漸く、その天眞を失ふにいたるといふ、學者の輿論のあるところなり。泰西の碩學、この點につきて、いへることあり。左に、その要旨をぬきいださむ。

かの美術にかゝはる音樂家、繪畫家、彫刻家の類は、自餘の、經驗にもとづきたる學問を修むる人とことなり、すこしも、文明進歩の庇蔭を蒙らず。詩人は、ことに、然り。然れども、前三者の美術家は、なほ、世の開化とゝもに、幾分か、その利益をうくることあり。すなはち、音樂家ならば、精巧なる絲竹、繪畫家ならば、良好なる毫刷、彫刻家ならば、鋭利なる刀刃の、發明せらるゝことあるなり。詩人にいたりては、然らず、その道具は、たゞ、感情と言語とのみなり。まかるに、感情は、いにしへの麁造の時代の人の富むところにして、言語も、また、その時代のものが、適健なれば、詩歌には、感情、言語、ともに、今のよりも、いにしへのものを、適切なりとす。

要するに、理論の世は、詩歌の世と、枘鑿相容れざるものなり。麁造の時代の人は、事物に感ずることふかきがゆゑに、櫻の花を、たなびく霞とれもひ、草葉の露を、玉かとあやしみ、汐燒く煙に、鳥部野を思ひうかべ、まのぶの草に、すきし昔を忍ぶなど、感情によりて、うごかさるゝこと、はなはだしく、殆と、そ

の本性を失ふに至るなり。これ、詩歌にとりては、ありがたきことにして、マコーレーガ、「詩歌を詠むものは、さらなり、詩歌を味ふものも、また、幾分か、狂ならざるべからず」と、いひ、また、「文明の時代に生れて、まことの詩人とならむとせば、一旦、その學問智識をなげうたざるべからず」と、いひしも、これなり。詩歌の、情にもとづくこと、かくのごとし。ホーマーの詩が、數千年の今日にいたるまで、その妙を稱せらるゝも、萬葉の歌の、妙にして、ことに、柿本人麿、山部赤人等が、歌聖と稱せらるも、支那三代の詩、兩漢の詩の、天質自然なるも、盛唐の詩の、神韻躍如たるも、皆、これ、情をもとゝし、詠歌に適切なる言語を用ゐたればなり。

然れども、詩歌を弄びしものはれほく、年月はながし、故に、後世の人が、前人の糟粕を嘗むまじと、こゝろして、遂に、智力の作用をたくましくし、意匠をめぐらし、新體をひらき、さからざるも、ひたすら、綺麗を事とし、文をして、質に勝たしめ、遂に、纖細鄙弱にれちいりしも、また、れのづからなる勢なり。わが朝の歌も、「後世のものは、大かた、氣力に乏しけれども、戀歌のみは、さすがに、實情にもとづきて、詠みたるものれほしと見え、割合に、誦すべきものあり」と、ある人のいひしは、味ふべきことか。

さはいへ、人間精神上の作用は、きはめて、複雜なるものにして、智、情、意の三者、いづれも、多少の關係をもつものなり。こ

こをもて、智といひ、情といふも、その複雜なる作用にいたりては、相互に、關係して、いづこまでも、その作用をことにするものにはあらず。故に、智の作用をれこす時にあたり、情の、これに伴ふことあり。情の作用あらはるゝにあたり、また、智の作用の、これに伴はざるにあらず。故に、詩歌にれいても、いづこまでも、情の作用のみに依賴するにはあらざるなり。（高田早苗著美辭學）

二三、歌がたりの一節

歌のさまの善惡を定むるは、海山の景色の、人によりて、心のひく方、異るが如し。そは、見る人の心の、高きと卑きとによりて、異ればなり。萬葉集に載せたる藤原、奈良の頃の人々の、優れたる歌どもは、富士の嶺の、雲に聳えて高く、熊野の海の、底ひも知らず深きが、見るも恐しく、臨むも危きが如し。古今集の頃なる歌は、須磨、明石のゆほびかなる海づら、嵐山、小倉の峰の、花紅葉の、折にあひて、目もあやなるが如し。古今集より下りては、景色は、やゝ、劣りぬれど、猶、れのづからなる海山なり。かくて、題詠の歌、もはらとなりてよりは、れのづからなる、まことのけしきは失せて、皆人の心もて、つくりなせる、庭の如し。

かの心高き人は、富士の嶺、熊野の海、須磨、明石、あらし、小倉の、れのづからなる景色をめづれど、心れくれたる人は、かの

巧に作りなせらむ、中島のありさま、遣水の心ばへ、岩木のたづまひなどの、世に似ず、をかしきにのみ、目くれて、かへりては、そを、れのづからなる海山にも優れりとぞ思へる。そは、れのがじしの心をひく方なりともいひて、やみぬべけれど、萬の道、心高き方を求むることのすぢなれ。さるを、歌のみは、高き方、求むる人のまれなるは、口をしきわざならずや。手書く道、繪のたくみは、更にもいはず、萬のはかなき業すら、物の上手は、そのすぢにつけて、いと高き心ばへのあるものなるを、世の歌人の、思ひくらべて、耻ぢざるこそ心得ね。この下れる世にして、古歌の心高く、すぐれたるよしを考へ定めたるは、わが縣居の翁や、はじめならむ。

かの、荷田の春滿の大人より、古の學の道は、よく、その山口をひらきたれど、歌の事は、さだかに、論へる事もなかりき。また、在滿ぬしが、八論とかいふは、新に、考へられたる事も見ゆれど、新古今の頃なるを、歌のみさかりなりとあるは、猶、深くも、たどらぬわざになむ。又、難波の契冲法師は、世にすぐれたる才ありて、古の歌を說き得たることの、正しきすぢは、この人をこそ、はじめとはすめれど、歌よむことの上までは、心れよばずやありけむ。今、漫吟集の歌どもを見るに、こまかに、巧なる歌は、見ゆれど、古の、高くのどかなる姿を、學び出でたりと、れぼゆるふしは、見えず。すべて、この法師の歌にしては、猶、ふさはしからぬやうにぞれぼゆる。かにかくに、古の、高き手

ぶりを志のばむ人は、わが縣居の翁が、教によらでやはあらむ。（村田春海著歌がたり）

二四、渡邊華山高野長英の傳記の後に

習慣にさからひ、時論をやぶり、さらに、一新路をひらくは、かたきが中の、かたきことなり。そをなすには、障礙百出、讎敵四方に起ることを、覺悟せざるべからず。千辛萬苦、つぐに、死を以てすることを覺悟せざるべからず。いにしへより、幾多の英雄、豪傑が、あらたなる主義をいだきて、當時の習慣にさからひ、時論をやぶりたる事蹟を見よ。生死のさかひ、間、髪を容れざる中にれいて、その主義を固定するを得たるのみなるにあらずや。コロンブスの、亞米利加發見における、ルーテルの、新教擴張にれける、また、わが親鸞、日蓮の徒の、新教主唱にれける、皆、然らざるはなきなり。

今日、わが國、西學さかりに行はれ、泰西の文物、悉く、採り用ゐて、のこすところなきにいたりしは、何人の賜なるか。今日、英、佛、獨の書を講ずるもの、殆ど、わが國の文書を讀むにひとしき、便利を受くるは、悉く、これ、諸先輩の艱難辛苦に成れる結果なり。當時、これらの人士が、西籍を講ずるがために、受けたる艱難をかへりみれば、まことに、人をして、心をさむからしむるものあり。諸先輩の、はじめて、西籍を講ずる、まづ、時人の凌辱を受くることを甘んぜざるを得ず。なにとなれば、習慣

は、この道を、異端の道となし、時論は、この學を、夷狄の學となし、これを學ぶものは、恰も、蠻夷に屈するものなりとなして、社會の、最も、賤視せしところなればなり。かくのごとく、世上の凌辱を忍ぶ外に、また、さらに、講學に關して、非常の艱難辛苦をなさゞるべからず。蓋し、はじめて、西籍を讀むものは、これを讀むはじめにれいて、これを讀むことを發明せざるべからず。言語、文章は、さらなり、風俗、習慣、全く、あひ、ことなる他國の文字を讀むことを、發明せむとするには、もとより、心血を吐くばかりの苦辛を嘗めざるべからず。無數先輩の心血積みて、赫々たる燈火となり、以て、書上の疑義難文を照し、れひれひに、その文字を解することを得たるなり。その艱難辛苦、いかにぞや。

かくて、それらの艱難辛苦に加ふるに、また、外より至る厄災ありて、常に、一身を危地に陷れむとす。これ、他なし、既に、西學に從事して、よく、その意義を解するに至れば、未發の主義、未見の道理を看破して、れのづから、頭腦を一新せざるを得ず。この一新の頭腦を以て、世上一般の形勢を察し、海外諸國の事情をつまびらかにし、以て、わが國情に對照するがゆゑに、その言論に發し、文章にあらはるゝものは、俗人をれどろかし、風情をうごかさゞるを得ず。こゝにれいてか、衆議、一身にあつまり、物論洶々、禍を釀し、身を殺すにいたるなり。かの渡邊華山、高野長英をはじめ、幾多の傑士が、かくのごとき厄

災を冒して、その學術を、世務にほどこす道をひらき、智識をひろむる目的をたて、大に、その道をすゝむる階梯を得たるは、その勇、その識、まことに、れどろくべし。されども、その世に處するありさまを見れば、なほ、荊棘叢中に入りて、身を保つが如し。暴風吹きれこりて、膚を劈くがごとき患なくば、これ、まことに、僥倖のみ。

華山、長英の徒が、かく、身の危きを忘れて、習慣にさからひ、時論をやぶりて、さらに、一新路をひらかむとせし精神は、日月と光を爭ふものなり。他の陳腐の儒說を誇張して、世と共に、浮沈するもの、みづから、碩學鴻儒といふも、これ、豈に、國に益あらむや。既に、國に益なし、國家に對する關係より見る時は、世上、その人あるも、また、なにかせむ。（藤田茂吉著文明東漸史抄錄）

二五、伴信友に與ふる書

こゝに、小弟身の上の事、申し候ふ。はてしもなきいひごとながら、絕窮の樣子、前後をつゞめて、この節のくるしみ、申しのぶべく候ふ。

まづ暮には、あてもなきに、春になりてと、借金方を、ことごとく、ことわり、どうやらして、年はとり候ふところ、たかゞ、八人扶持ばかりを、こねまはし候ふことゆゑ、なにとして、參るべきや。そこへ、火事場の出醫を申しつけられ、ひつこみもならずと、受け候ふところ、火事羽織なし。それのみならず、醫者

は、醫者なるが、藥箱の上覆なしといふ私の事ゆゑ、大騒して、苦むところに、駿河より、眞柱の料、一兩來れり。ところが、いまだ、年始に出でず、外は、すてれいても、本など借るところへは、行かねばならぬゆゑ、それをもつて、まづ、人の質入したる熨斗目をかり出して着て、たゞ、一日に、年始をつとめ、翌日、もとの穴へ納め、それにて、火事羽織、藥箱の外覆を買ひ、まづ、ほつと息をつくと、去年、門人のわるものが、藏本販を質入したる十兩の催促が來て、板を、さきへひき取られむとするに、これには當惑、同心をたのみて、やうやう、六月まで延べ候へども、これにも、一兩ばかり。尤も、人に借りて、利をいだしたり。まづ、よいとれもふと、去年、大わづらひの砌、質入したる本ども、元利ともに、十兩ばかりのもの、だんだん、ことわり申しれき候へども、十四五箇月になるゆゑ、流るといふに、人を入れて、ばしといひても、聞かず。やむをえず、佩物にて、まづ、利分半金のかたに入れて、をさめたり。ところが、三月にちかより、去年三月質入したる雛が流るといふことなり。これを流しては、娘が泣くゆゑ、苦勞、いふばかりなし。こゝに、虚病をかまへて、例の火事羽織と、不斷着用羽織とを入れて、一兩二朱半にて、受け出したれど、節句の日に、子供に着がへせさすること、かなはず、今年、はじめて、不斷のまゝにて、節句をせさせ候ふ。外へは出づなと、いひつくれば、れとなしく居り候ふ二人の子供が、心のうちの不憫さ、小弟の心の中、御察し下さるべく候

ふ。ところへ、和名抄の寫が出來たりといひて、その料をれこせといふ。これかれ二朱。その外、一歩、二歩の借は、櫛の齒をひくがごとし。例の島縮緬の小袖、一つあるところ、漆ぬりのごとくなりて、入湯にも行かれぬ仕合、羽織がなきゆゑ、内會も出來ず。この節のありさま、億萬中の一を、申し上げ候ふも、かくのごとくに候ふなり。それゆゑ、屋代へも、塙へも、本を借りに行くこと出來ず候ふなり。この中にて、古史傳の著述は、怠なく、あひつとめ申し候ふ。御憐み下されたく候ふ。

さて、古人も「貧を語るは、求むる事あるに似たり」とか、申すことにて、他人には、申しがたきことながら、心ありて、君には申し候ふ。それは、その中にて、よく、その學をすることゝ、さきに、譽められ、むといふ弟の情にて、なかなか、以て、一兩や、二兩や、四兩のめくされ金の合力を望むがごときやうにれぼし召され下さるまじく、そこらのいやしき心は、露ばかりも、これなきこと、神と、君とは、よく、志ろしめさむ。志からば、この事を祈る心の實は、いかにといふに、とても、この分にては、とりつゞきがたく、なかなかに、屋敷入口、邪魔になり候ふゆゑ、暇をとりて、浪人となり候はゞ、かへつて、よきすべも出來べしと存じ候ふなり。これは「首くゝらうと思ふいかに」と、相談するたぐひにて「志かせよ」と、のたまはぬ君なる事は、知りながら、あまり、ぢれたさに、かくは、思ひつき候ふことなり。いづれ、大行は、細瑾をかへりみがたき場合も御座候ふこと、御汲み

わけ下さるべく候ふ。あゝ。あゝ。（平田篤胤書簡寫抄錄）

二六、そゞろごと五篇

一、雪の朝

雪のれも志ろう降りたりしあした、人のがりいふべき事ありて、文を遣るとて、雪のこと、何ともいはざりし返事に「この雪いかゞ見ると、一筆、のたまはせぬほどの、ひがひがしからむ人の、仰せらるゝ事、聞き入るべきかは。かへすがへす、くちをしき御心なり」と、いひたりしこそ、をかしかりしか。今は、なき人なれば、かばかりの事も、忘れがたし。（徒然草）

二、れも影

名を聞くより、やがて、面影は、推し測らるゝこゝちするを、見る時は、又、かねて、思ひつるまゝの顔したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、この頃の人の家の、そこ程にてぞありけむと覺え、人も、今見る人の中に、思ひよそへらるゝは、誰も、かく、覺ゆるにや。又、いかなる折ぞ、只今、人のいふ事も、目に見ゆる物も、わが心の中も、かゝる事の、いつぞやありしかと覺えて、何時とは、思ひ出でねども、まさしく、ありしこゝちのするは、われば、かく、思ふにや。（徒然草）

三、過きにし方

靜に思へば、よろづ、過ぎにし方のこひしさのみぞ、せむ方なき。人靜りて後、長き夜のすさびに、何となき具足取りまた

ため、殘し置かじと思ふ反古など、やり捨つる中に、なき人の、手習ひ、繪かきすさびたるこそ、たゞ、その折のこゝちこそすれ。この頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。（徒然草）

四、　賤しげなる物

賤しげなるもの。居たるあたりに、調度の多き、硯に、筆の多き、持佛堂に、佛の多き、前栽に、石、草木の多き、人に逢ひて、詞の多き、願文に、作善、多く、書き載せたる。多くて、見苦しからぬは、文車の文、塵塚のちり。（徒然草）

五　見ぬ世の友

ひとり、燈火の下に、文をひろげて、見ぬ世の人を、友とするこそ、こよなう、慰むわざなれ。文は、文選のあはれなる卷々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この國の博士どもの書けるものも、いにしへのは、あはれなる事、多かり。（徒然草）

二七、文學家の逸話二章

一、　殿守の伴の御奴

今は、昔、小野宮の太政大臣、左大臣にてれはしけるとき、三月の中ばの頃、公事によりて、内に參り給ひて、陣の座にれはしけるに、上達部二人三人ばかり、參りあひて、さぶらはれけるに、南殿の御前の、櫻の樹の、大きに、神さびて、えならぬが、枝も、庭まで、さしれほひて、れもしろく咲きて、庭に、ひまなく、散

りつみて、風に吹きたてられつゝ、水の涙などのやうに見えけるを、大臣「えもいはず、れもしろき物かな。例は、いみじく咲けど、いと、かゝる年は、なきものを、土御門の中納言の參られよかし。これを見せばや」と、のたまふほどに、はるかに、上達部の、前をれふ聲あり。官人を召して、「この前は、たが參らるゝぞ」と、問ひ給ひければ、「土御門の權中納言の參らせ給ふなり」と、申しければ、大臣「いみじく、興ある事かな」と、喜び給ふほどに、中納言參りて、座に居るやれそきと、大臣「この花の、庭に散りたるさまは、いかゞ見給ふ」と、ありければ、中納言「げに、れもしろうさぶらふ」と、申し給ふに、大臣「さらば、れそくこそ侍れ」と、ありければ、中納言、心に思ひ給ひけるやう、この大臣は、たゞ今の、和歌にきはめたる人にれはす。それに、はかばかしくもなからむ事を、面なく、うち出でたらむは、あらむよりは、いみじくわろかるべし。さりとて、やんごとなき人の、かく、責め給ふことを、すさまじくてやまむも、便なかるべしと、思ひて、袖をかきつくろひて、かくなむ申しける。

殿守のゝともものみやつこ、心あらば、
この春ばかり、あさぎよめすな。

と、大臣、これを聞き給ひて、いみじく、ほめ給ひて、「この返し、更に、えせじ。れとりたらむに、長き名なるべし。さりとて、まさらむ事は、あるべき事にもあらず」とて、たゞ、古歌をれぼえ申さむと、思ひ給ひて、忠房が、唐へ行くとて、よみたりける歌をな

む、かたり給ひける。

この權中納言は、本院の大臣の、在原の北方の腹に、うませ給へる子なり。年は、四十ばかりにて、かたち有樣、うつくしげになむありける。人がらも、よかりければ、世のれぼえも、花やかにてなむ。名をば、敦忠とぞいひける。また、本院の中納言ともいひけり。和歌をよむこと、人にすぐれたりけるに、かゝる歌をよみ出でたれば、いみじく、世にほめられけりとなむ、語り傳へたるとなり。（今昔物語）

二、　月上長安百尺樓

今は、昔、村上天皇の御代に、大江朝綱といふ博士ありけり。やんごとなかりける學生なり。年ごろ、道につけて、れほやけにつかへけるに、いさゝか、心もとなき事なくして、つひに、宰相までなりて、年七十餘にして、失せにけり。

その朝綱が家は、二條と、京極とになむありければ、東の川原、遙に、見えわたりて、月、れもしろく、見えけり。さかるに、朝綱うせて後、あまたの年をへて、八月十五夜の月、いみじく、明かりけるに、文章を好むともがら、十餘人ともなひて、月を玩ばむがために、「いざ、故朝綱の、二條の家に行かむ」と、いひて、その家に行きにけり。その家を見れば、ふるく荒れて、人げなし。家どもゝ、皆、たふれ傾きて、たゞ、煙屋ばかり殘りたるに、この人人、破れたる椽に居並みて、月を興じて、詩の句を詠じけるに、「踏沙披練立清秋、月上長安百尺樓」と、いふ詩は、昔、唐に、某とい

ひける人、八月十五夜に、月を玩びて、作れる詩なり。それを、この人々詠じけるに、また、故朝綱の、文華の微妙なりしことゞもを、いひ語りけるあひだ、丑寅の方より、尼一人出できて、問うて、曰く、「こは、たれ人の、かくは、來て遊び給ふぞ」と。答へて、曰く、「月を見むために、來れるなり。また、汝は、いかなる尼ぞ」と。尼の曰く、「故宰相殿に仕へなれし人は、尼ひとりなむ、今に殘りて侍る。この殿に、男女のつかへ人、その數はべりしかども、皆、死にはてゝ、れのれ、ひとり、今日明日とも知らずて、侍るなり」と。道を好む人々は、これを聞きても、あはれにれぼえて、尼を感じて、或は、泣く人もありけり。

ふかるあひだ、尼の曰く、「抑も、殿原の、「月は、長安の百尺の樓に上れり」と、詠じ給ひつるが、いにしへ、故宰相殿は、「月により て、百尺の樓に上る」とこそ、詠じ給ひしか。これは、似はべらず。月は、なにしに、樓には上るべきぞ。人こそ月を見むがために樓には上れ」と、いふを、この人々、聞きて、涙を流して、尼を愛づること、限なし。抑も、尼は、何者にてありしぞ」と、問へば、尼、「れのれは、故宰相殿の、物はりにてなむ侍りし。それが、常に、聞きしことなれば、殿原の詠じ給ふ時に、ほのかに、れぼえ侍るなり」と、いへば、人々、終夜、この尼に談じて、皆、尼に、かづけものしてなむ、曉に歸りける。これを思ふに、朝綱の家風、愈、れもく覺ゆ。いひがひなき女すら、かくの如し。況や、朝綱の文華、思ひやるべしとなむ、語り傳へたるとなり。（今昔物語）

二八、文話一則

喜を叙するに、喜といひ、悲を叙するに、悲といふは、文の上乗にあらず。喜といはずして、れのづから、喜を感ぜしめ、悲といはずして、れのづから、悲を感ぜしむ。文の妙、こゝにあり。曩に、或人が、近松門左衛門の逸事を記せるを讀むに、近松、嘗て、淨瑠璃を論じ、「あはれといふ時は、含蓄の意なくして、その情うすし。あはれなりといはずして、れのづから、あはれなるが緊要なり」と、いへり。さすがは、ともに、文をかたるべき人なり。

されども、なにが故に、悲喜をいはずして、悲喜を感ぜしむるか。その理のよるところをきはめざれば、いまだ、これを立て、作文の原則とは、なしがたかり。嘗て、れもふに、これ、一に、讀者の心が、これを會得するにあたりて、直に、その意味をつまびらかにし得ると、僅に、その意味をれしはかりて止むとの差違あるがゆゑなり。すなはち、一は、明快にして、一は、難澁なるがゆゑなり。

たとへば、たゞ、悲といはゞ、生別の悲も、死別の悲も、貧窶の悲も、みな、悲なり。さらに、進みて考ふれば、れなじ、生別にも、朋友の生別あり、親戚の生別あり。れなじ、朋友の生別にも、われ往くあり。かれ往くあり。かくの如くにしてゆかば、その悲の事情と場合とは、千萬、きはまりあるべからず。千萬無窮の事情と場合とは、只、一の悲といふ詞により、想像すべからざる

や、明なりされば、今、單に、生別の悲といふ時は、たゞ、漠然として、生別の悲を、れしはかり思ふのみ。その意味、晦澁にして、明ならず、その感も、隨ひて、淺し。さるに、もし、楠公櫻井驛の事を讀まば、一の悲字なきも、既に、こゝろうごきて、禁ぜざるものあらむ。これ、その事情と場合と、一目の下に、了々として、心に上り來り、その生別の、死別たり、悲の、哀たる意味、たゞちに、讀者につまびらかなればなり。必ずしも、外より、悲といはずして、讀者が、内に、みづから、悲をれこせばなり。

蓋し、悲といひ、喜といふがごとき詞は、歸結の詞にして、その歸結に達するまでには、これに達する次第あるべし。その次第をれきて、たゞに、歸結のみあぐるは、議論するものが、その是非のゆゑを細示することを怠りて、ひとり、是なり、非なりとのみ、さけぶにたなじ。たれか、耳を傾くるものあらむ。故に、能文の士は、その歸結を後にして、まづ、その次第を叙することに、力を用ゐるなり。

われ、平生、白石の折たく柴の記をよみ、その文、眞率にして、志かも、神韵ゆたかなるに服せり。その乃父が、その主蘆澤某の、手づから誅せむと怒れるを、諫止せる事を叙して、

また、宣ひ出すこともなく、われも、また、申し候ふ事もなくて侍ふほどに、やゝありて、面に、蚊の集りぬるに、「逐ふべし」と、宣ひしほどに、面を動しければ、血に飽きて、胡頽子の如くになりし蚊の、六つ七つ、はらはらと、地に落ちしを、懷の

紙を取り出して、包みて、袖にして侍ふ。

と、いふが如き、實に、三昧に入れり。もし、歸結をいふに、急にして、

君も、うち案じ居たまひしが、やうやうと、色やはらぎたまひぬ。われは、ひたすらに、君の御面のみ伺ひをり、れのれの面に、蚊の集りぬるも覺えず。

などせば、索然として、人を動すこと、その半にもれよぶ能はざらむか。（森田思軒著ユーゴー小品抄錄）

二九、文學の價値

文學は、その範圍、きはめて、廣くして、その中、或は、智識を開發し、或は、德行を奬勵するを、目的とするものありといへども、純粹なる美文學にむかひて、その用不用を論ずるは、全く、謬見に屬す。吾人が、用不用といふは、もと、なにか一定の目的ありて、これに達するに適するや否やの意に過ぎず。汽車汽船の類は、人生、有用のものなり。これ、運搬、もしくは、行旅の目的を達する最好方便なればなり。工學、農學等も、また、人生有用のものなり。これ、吾人の目的に達せむとの方便に關する學科なればなり。すべて、吾人が有用とするものは、目的それ自身につきて、いふにあらずして、目的に達する方便につきて、いふことなり。有用とは、なにかに有用なるを意味す。そのなにかは、目的に外ならざるなり。然るに、美文學は、目的それ

自身なり。吾人は、美文學によりて、一種高尚なる精神上の快樂をうくるを得。かくのごとき、精神上の快樂をうくるは、已に、目的に達したる證なり。これを、方便として、また、他の目的に達せむとするにあらず。これが、即ち、終局の目的なり。この故に、美文學の用不用を論ずるは、もと、意味なきことなり。

春天、日あたゝかにして、櫻花、爛熳たる時、いかに、市民があらそひいでゝ、これを賞翫するか。その、これを賞翫するは、これを、方便として、なにか、また、他の目的に達せむとするにあらず。櫻花を賞翫して、精神上の快樂をうくるは、これ、その目的なり。豈に、また、櫻花の用不用をいふべけむや。もし、單に、口腹の利益のみを、こひねがはゞ、櫻花のごとき、すべて、わが日本國の美を成すものは、これを伐りつくして、薪炭となし、そのかはりに、菽麥を植うるにしくはなかるべきなり。文學の社會にれける、なほ、花の自然界にれけるがごとく、吾人、精神上の快樂を增進するものにして、いかなる國土にありても、多少、精神上の發達をなしたる以上は、これを要せざるなし。もし、これなしとせば、その社會は、いかに、落寞の感に堪へざらむ。人類は、日々、夜々、マッチを製し、シャボンをつくり、汗をながし、肉をつからし、悲哀困苦、以て、一生を送り得べきものにあらず。たとひ、かくの如くにして、一生を送り得べしとするも、そは、決して、高尚なる生活とはいふ能はざらむ。果して、然らば、文學の社會にれける價値、問はずして、知るべきなり。

試に、眼を宇内に放ちて、これを見よ、ホメロス、ダンテ、セクスピーヤ、ゲーテ等、無數の文學者を、歐洲文化の歷史より、抹殺し去らば、その光彩を失ふこと、蓋し、又、甚しかるべし。荒れはてたる野園の中にも、數點の菊花あらば、もはや、幾多の興味を添ふるにあらずや。たゞ、一箇の蓮花すら、泥水の池をして、風趣れほからしむるにあらずや。文學がいかに、國家の裝飾たるか、これを知らざるものは、眞に、青盲なるのみ。（井上哲次郎文稿抄錄）

中等國語讀本卷八 終

明治三十四年十一月十五日印刷
明治三十四年十一月十九日發行
明治三十五年二月四日訂正再版印刷
明治三十五年二月七日訂正再版發行
明治三十六年一月二十日二十版發行

明治三十五年二月十四日
中學校用文部省檢定濟

定價表
一、二、三、四 每冊貳拾貳錢
五、六、七、八、九、十 每冊貳拾四錢

不許複製

著者　東京市本郷區駒込淺嘉町七十八番地　落合直文
發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　三樹一平
印刷者　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　新井豐造
印刷所　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　明治印刷所
發行所　東京市神田區錦町一丁目（特電話本局二四三八番）　明治書院
關西專賣　大阪市東區備後町四丁目（特電話東二四九番）　吉岡平助

[illegible]

[illegible]